





# 創立七十周年記念誌

国立音楽大学附属中学校・高等学校

2009～2019の歩み



# 沿 革

西暦	元号	月日	事項内容
1926年	(T15)	4月	東京高等音楽学院創立
1949年	(S24)	4月	1月18日認可により、 <b>国立音楽高等学校</b> 及び、 <b>国立中学校</b> 設置 有馬大五郎 校長に就任 大学の教室、桐朋高校の武道場を借り受け授業開始 中学・高校とも定員は一学年40名1クラス
1950年	(S25)	2月20日 9月	大学設置認可を受け「国立音楽大学」となる 楽器研究所設置 高校調律科の実習室を兼ねる
1951年	(S26)	2月24日 4月	法人組織を変更し「学校法人 国立音楽大学」となる 町制施行により「国立町」となる
1952年	(S27)	4月	<b>中学校が大学敷地内に仮移転</b> 東京都多摩地区音楽教育大会開催 有馬大五郎による講演
1953年	(S28)	6月	「音楽教育の私見」の他、附属小学校・中学校児童生徒による合唱とリトミックを行う
1954年	(S29)	9月	<b>中学校が附属小学校南校舎に移転</b>
1955年	(S30)	10月 12月1日	国立校舎5号館竣工（主にレッスン室） <b>音楽高校20校による全国音楽高等学校協議会（全音高協）が設置され、永年理事校となる</b>
1958年	(S33)	4月 5月 5月	国立校舎（大学本館、現在の2号館）改築第一期工事竣工 富士見台校舎竣工 高校が桐朋学園武道場から、中学が南校舎から移転 <b>中学校が文部省の昭和33年度中等教育実験学校となる 期間は1年間（翌年7月に研究発表会開催）</b>
1961年	(S36)		楽器研究所移転 中高敷地内に新築移転、調律科の教室も兼ねる
1963年	(S38)	4月 4月	別科調律専修学生募集を始める <b>音楽高等学校に普通科を設置（2月24日に認可）</b> 中高校舎の南側に新校舎を増築
1964年	(S39)		<b>全国音楽高等学校協議会(全音高協)第1回全国大会</b>
1966年	(S41)	4月12日	大学が上水台校舎（玉川上水）に移転
1967年	(S42)	4月	附属小学校新校舎竣工、移転
1969年	(S44)	12月5日	<b>全国音楽高等学校協議会(全音高協)全国大会を本校で開催</b>
1975年	(S50)	4月 5月	附属各校・園名の統一、変更 国立音楽大学附属音楽高等学校 国立音楽大学附属中学校 国立音楽大学附属小学校 国立音楽大学附属幼稚園 有馬大五郎 学長に就任 大学院委員長と附属各校・園長兼任
1977年	(S52)	8月	附属中学校・音楽高等学校新校舎（現在の1号館）竣工 富士見台校舎から大学の国立キャンパスへ移転
1978年	(S53)	3月16日 4月24日	大学位置変更 これにより、法人・大学とも所在地が立川市になり、従来の「国立校舎」「上水台校舎」の名称は廃止 附属中学校・音楽高等学校位置変更 国立市西2-12-19へ
1979年	(S54)	4月	海老澤敏 学長に就任 大学院委員長、附属各校・園長兼任

西暦	元号	月日	事項内容
1982年	(S57)	9月	附属幼稚園、改築のため一時移転 仮園舎を附属小学校内に建設
1983年	(S58)	4月	全国音楽高等学校協議会（全音高協）理事長校となる
		8月	附属幼稚園新園舎竣工、移転 9月から保育再開
1989年	(H元)	5月	矢島只實 附属小学校校長代行に就任
1991年	(H3)	4月	学園通則施行・公布により学長が兼任していた附属各校・園長に専任者を置く 附属中学校・音楽高等学校長：望月雄二 附属小学校長：矢島只實 附属幼稚園長：大場里子
1995年	(H7)	4月	岸根保夫 附属中学校・音楽高等学校長に就任
1996年	(H8)	4月6日	オーストリア リンツ州立音楽高等学校との交流演奏会（於 国立音楽大学講堂）
		11月15日	全国音楽高等学校協議会（全音高教）全国大会を本校で開催（～11.16）
1997年	(H9)	4月	岡部徳三 附属中学校・音楽高等学校長に就任
		11月	第1回 秋の演奏会（於 音楽の森コンサートフロア）
1999年	(H11)	3月	附属中学校卒業式を附属音楽学校卒業式と分離して行う これに伴い、2003年（H.15）3月より中学校卒業作品の創作合唱は卒業演奏会で披露されることになる
		4月	附属中学校・音楽高等学校創立50周年
2001年	(H13)	11月	附属中学校合唱部NHK全国学校音楽コンクール全国大会金賞受賞
2003年	(H15)	3月	附属中学校・音楽高等学校新校舎（3号館）落成
2004年	(H16)	4月	国立音楽大学附属中学校・高等学校に校名改称 附属高等学校普通科がカリキュラム改変に伴い共学となる
2005年	(H17)		附属高等学校で2、3年生徒に対し特待生制度ができる
		10月1日	第1回招待演奏会（於 一橋大学兼松講堂）
		11月5日	第1回ソロ・アンサンブル定期演奏会（於 トップホール）
2006年	(H18)	11月17日	全国音楽高等学校協議会（全音高協）全国大会を本校で開催（～11.18）
2007年	(H19)	4月	撰梅正人 附属中学校・高等学校長に就任 附属高校音楽科にて中学生対象の土曜講座「KUNIONへの道」（後のKUNION講座）始まる
2008年	(H20)	4月	全国音楽高等学校協議会（全音高協）理事長校となる
2009年	(H21)		附属中学校・高等学校創立60周年
2011年	(H23)	4月	荒木泰俊 附属中学校・高等学校長に就任 中学校 普通コース・音楽コースの2コース制になる
2013年	(H25)	4月	中学校にて小学生対象「KUNION講座」始まる
2016年	(H28)	4月	星野安彦 附属中学校・高等学校長に就任 KUNION講座に替え「くにたち de ☆Start」始まる
2017年	(H29)	4月	高等学校普通科 総合進学コース・特別進学コースの2コース制になる
2019年	(H31)	4月	大友太郎 附属中学校・高等学校長に就任 中学校 文理コース（総合プログラム・特別選抜プログラム）・音楽コース（音楽準備プログラム・音楽実技プログラム）の2コース、4プログラム制になる

# 学校法人国立音楽大学附属中学校・ 高等学校の創立70周年に寄せて

理事長

山 田 晴 彦



学校法人国立音楽大学附属中学校・高等学校の創立70周年を迎えるにあたり、保護者、同窓会の皆様、関係機関の皆様方には、本校の教育活動に絶大なるご支援を賜り厚く御礼申し上げます。学校法人国立音楽大学は、前身を「東京高等音楽学院」（1926年設立）とし、「自由・自主・自律の精神を以て良識ある音楽家、教育家を養成し、日本及び世界の文化の発展に寄与する」ことを基本理念として運営されてきました。同様の建学精神に拠って立つ附属中学校・高等学校は、1949年に、当初「国立中学校」、「国立音楽高等学校」として、我が国で初めて音楽を柱とした教育を行う学校として開校され、今日に至っております。人間形成における音楽の大切さは現在も変わりません。“くにたち”ならではの一贯した音楽溢れる教育環境の中で、附属中学校・高等学校の皆さんが知性、感性を磨き、豊かな人間性を備えた有為な人材として成長し、将来音楽の世界はもちろんのこと、社会の様々な分野で活躍していけるように、教職員一同、全力を尽くしてまいりたいと思います。皆様方の今後更なるご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

# 創立70周年 自由を守り抜く！

校 長

大 友 太 郎



朝、国立駅南口から斜めにまっすぐにのびる富士見通りは大勢の生徒たちで大混雑です。

左側の歩道は制服を着た近隣校の生徒たち。右側の歩道は思い思いの服を着たKUNION附属小中高生たち。にぎやかで楽しそうに登校する姿は、昔から変わりません。

音高入学式で聞いた初代校長有馬大五郎先生の「この学校は自由であります！」との力強い言葉の響きは今でも私の耳に残っています。そして本校卒業の翌年、有馬先生と固い握手を交わしてドイツ留学へと旅立ったのはもう45年前のことになります。

創立70周年を迎えた国立音楽大学附属中学校・高等学校を思うとき、皆様の心の中には何が見えるでしょうか。

目まぐるしく人も物も技術も変わる、時代の流れに置き去りにされるのではないかと危機感を持ちつつ、私は第9代目校長として何としてでも「自由」を守り抜いて行きたいと思っています。

どうぞこれからもご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

# 70周年から80周年その先へ向けて ～紡いでいく未来～



P T A 会 長

森 佐 和

国立音楽大学附属中学校・高等学校 P T A を代表し創立70周年のお祝いを申し上げます。

昨今は同空間に居ずともインターネット動画で技芸を身に付けられる時代です。人から人への伝承形式に敢えて臨む意義を心得なければ、差は顕示できません。多数回に亘る多時間の師弟や仲間との言葉や技術のキャッチボールは、電源ON・OFFで自己完結可能な世界とは遠く、非常に貴重な体験です。何十年も思い出され悩ましかったり喜び震える感情は、空気を共にした恩師や仲間との共同生活から得られるものです。そこから更に研鑽による成熟した技芸へと発展するのだと信じます。

既に「くにたち」が家族の一人のように良きも納得いかぬも含め愛しまれてる方々と多く出会いました。今の生徒達も次世代を通わせ「くにたち」と関わりは続くと想像します。

芸術が繋いだ教育者・生徒・保護者のバランス構築にこれからも関われば幸いです。



# 目 次

沿革年表	2
挨拶	理事長 山田 晴彦 4
挨拶	校長 大友 太郎 5
お祝いの言葉	PTA会長 森 佐和 6
<b>総論 10年間の動き</b>	
本校の歩みを振り返る	星野 安彦 9
附属高等学校 この10年間の取り組み	吉野 康弘 14
高校普通科のコース制と中学のプログラム制について	滝澤 秀 15
音小中交流会	星野 安彦 16
音楽科の変革について	米持 隆之 17
ソロ・アンサンブル定期演奏会について	米持 隆之 19
アンサンブル・ランチコンサートについて	菊地 珠里 21
ソロイスト・ランチコンサートについて	菊地 珠里 22
<b>地域と学校</b>	
招待演奏会について 年表	米持 隆之 24
音楽科生徒による出張コンサート 年表	根本 由紀 26
「祝祭」が望むこと	山本 康雄 30
寒き夜空に願いを贈る	山本 康雄 32
初の共催による演奏会	山本 康雄 32
<b>国際交流</b>	
台南市立大成國中音楽班 (台湾の中学生オーケストラ)との交流会について	五十嵐 稔 34
台湾の中高校生オーケストラと母校	徳岡 直樹 34
中学生・高校生の海外短期留学について	五十嵐 稔 36
オーストラリアでの充実した10日間	高野花菜子 38
リンツ音楽高校 交換留学体験記	嶋津 玲 39
<b>拾 遺</b>	
東日本大震災その時	秋場 健志 42
2020東京オリンピック・パラリンピック 参加国国歌調査演奏プロジェクト	五十嵐 稔 43
<b>資料編</b>	
データでみる学校	45
生徒数一覧(中・音・普)	46
担任一覧(中・音・普)	53
くにたち音楽会の記録	56
学校旅行(中・音・普)	57
できごと年表セレクション	60

# 総論

## 10年間の動き

## 本校の歩みを振り返る ～ 2010 年以降の 10 年間

星野 安彦 (前校長 音楽科 26 回生)

本校の 2010 年～ 2019 年の歩みは、音楽科・普通科の改革と、地域・外部での活動や国際交流の活発化に集約できるのではないだろうか。以降項目別に分けて振り返ってみたいと思う。

### 音楽科・普通科の改革

2010 年代が始まり、音楽科、普通科共に受験者数減に危機感を持っていた。2011 年の東日本大震災や政権が変わるなどの時代の推移の中で、経済的な格差が大きくなった。そのため、かつて日本を支えていた中流家庭の減少に拍車がかかり、私学を検討する層の減少へと推移していた。中高ともに新たな施策を打ち出さなければ、このままの教育環境を維持することが困難になりかねない状況だった。こうした中で音楽科は斬新な改革として、入学試験で実技試験を免除するという策を取った。一定水準の学力を持つ受験生に対し実技試験を免除するという入試の型を考え、3 年間で音楽大学の教育系に進学できる力を養成する事が可能となるカリキュラムを整えた。一見無謀なことと見えるが 2019 年現在、この入試方法で入学してきた生徒の多くは、問題なく進学を果たしている。そして全国の音楽高校の中でも、定員充足率 85 パーセント超のレベルを維持している事は、この時勢にあって大健闘と言えるだろう。また普通科は 2017 年度より総合進学、特別進学の 2 コース制をとり、総合進学コースでは従来通り個々の進路希望に沿った授業が選択できるカリキュラムを設定し、大学の AO や指定校・公募推薦も視野に入れた学習を進めるようにしている。特別進学コースではプラスティの学習コーチングを導入し、国公立、難関私学の合格を目指せるよう授業改革なども行っている。こちらも充足率は少しずつ増加しており効果も現れ始めている。2020 年の大学

入学試験で、改革結果がより鮮明に現れることとなるだろう。今後も訴求力アップを目指し、授業改革など研究の手を緩めずに進んでもらいたい。

そして中学校は 2019 年より普通コースを文理コースと改称し、音楽コースとの性格差をより鮮明にした形で募集活動を進め始めている。中学の改革はこれから始まるのである。

### 附属間の連携・交流

幼稚園、小学校、大学との関係も、より深まった時期でもある。高大接続として高校 2 年生の大学体験授業から始まり、高校 3 年生の音大での半期ずつの受講（大学聴講生制度）も加わった。これは現在も続いており、内容の濃い授業体験による音大への関心度増加へと繋げる事が主目的である。音楽科ばかりでなく、普通科の生徒の音大への進学数も毎年一定数存在していることから、今後も履修できる講座数の拡大を目指し、関心度をさらに高め、進学率の安定を図るべきだろうと考える。

附属小学校との関係は音楽交流会が中学で開かれるようになり、生徒が主体的にプログラム（ゲーム、ソリスト、合唱、合奏による演奏鑑賞、合同合唱など）を考えて、児童を迎える形が整っている。小中生お互いが、それぞれの存在と繋がりを意識できる時間となっており、小学生の進学の意欲や中学校への興味喚起に繋がっている。

また毎年秋には高校 2、3 年生の生徒が附属幼稚園で保育実習体験を行っている。こちらは高校生キャリア教育の一環で、幼児教育に対する興味喚起に繋がり、大学幼児教育への進学に貢献している。附属幼稚園の園児は年中、年長と附属小学校に訪れ、小学校 2 年生や 5 年生のリードのもと、ゲームや縁日の模擬店、校内探検、絵本の読み聞かせ、歌の交換など行い、楽しく時を過ごしている。また各附属間、幼稚園－小学校、小学校－中学校で委員会が存在しており、各機関の諸問題について会合を持ち、連携を図っている。さらなる関係発展に期待したい。

## ユリウス・カルツァス氏との出会いと Magnificat (マニフィカト) 初演

2009年の交流演奏旅行で、高校合唱部はリトアニアの首都ヴィリニウスで、同国一流の合唱団と共演することとなったのだが、その演奏会を聞き、感銘を受けた同国作曲家のユリウス・カルツァス氏は、演奏会終了後日本のある楽譜への感動を伝えるに楽屋を訪れた。その際指揮者の荒木泰俊先生はその楽譜の楽譜を献呈した。翌日氏は合唱部が滞在中のホテルまで足を運び、返礼の気持ちを伝えるため自作品をフロントに預けられたのだが、彼らは日本に帰国後、その作品の日本初演を計画し、氏に指揮をお願いするため日本に招聘したのだった。そしてカルツァス氏は初来日し、日本での夢のような体験が出来たことに感謝し、その御礼にと献呈して頂いた楽譜が「Magnificat」だった。オルガン付きのこの作品は2015年、法人の90周年事業として中高生徒と中高合唱部の有志により日本で初演、リトアニアでもヨーロッパ初演を行うこととなった。その反響は両国でも大きく、各方面に注目されることとなった。氏は2019年も本校に立ち寄って合唱を指導して下さった。リトアニアの合唱水準は高く、日本も学ぶところが多い。このような交流が続くこと、発展することを期待したい。

## 平和への希求～国立市との連携

話は前後するが、2009年7月に高校合唱部はリトアニア建国1000年記念イベント「知られざるリトアニア」に招待され、リトアニア国歌と同国作曲家の合唱曲、そして日本国国歌「君が代」を演奏している。一国家の1000年を祝う式典に本校の合唱部が招待されただけでも驚きだが、加えてリトアニア国歌を歌えた事は驚き以上に光栄な出来事だった。同年3月に行った、杉原千畝記念館修復のためのチャリティコンサートなどの活動が認められたからだろう。また合唱部は杉原記念館訪問に先立ってポーランドの 아우シュビッツ＝

ビルケナウ強制絶滅収容所（同施設には2006年2012年2018年と訪れているー以下アウシュビッツと略す）も訪れており、ナチスの難を逃れたユダヤ人にビザを発行し続けた杉原千畝氏のことに加えて、あの歴史上最も恐ろしい事が行われたアウシュビッツも知ることとなり、平和の意味について、音楽について、世界における自分たちの存在について、深く考える機会になったのだった。

そしてその体験は翌年2010年、合唱部と同行した複数の教員が中心となって、アウシュビッツでガイドをする唯一の日本人、中谷剛氏を国立にお招きする事に繋がる。同窓会、附属中高、国立市が主催となり、氏の講演会が国立市民芸術小ホール、本校講堂の2箇所で開催されたのだった。「差別」についての氏の話は自身の体験を含んでおり、大変示唆に富んだ内容だったことを思い出す。折しも国立市は平和都市宣言10周年で記念行事を計画していたこともあり快く協力してくれた。現在の国立市との信頼関係構築は、この時から始まったと言っても過言ではない。そしてこの行動はさらに次へと繋がる。2011年、あの東日本大震災の原子力発電所事故で避難を余儀なくされ、埼玉県加須市の旧騎西高校で生活していた双葉町の方々を元気付けようと、当時のPTA会長の呼びかけに応じ、有志による「東日本大震災被災者と共に音楽を楽しむ会」が立ち上がったのだ。在校生、卒業生を含む35名の有志が出資者を求めあちらこちらへと出向き、趣旨説明をして寄付を募り、それを資金として加須までの移動費用を捻出するという画期的なものだった。津波により校歌の楽譜が紛失した双葉町小学校、中学校の校歌を、録音から楽譜を起こし、被災された方々の前で演奏した。その楽譜は町民に献呈され、後日双葉町の人たちが自分たちの歌声をプライベートCDに収め、本校に寄贈してくれたのだ。心温まる交流がなされたのであった。

2012年、国立市との関わりから「普通の日になったのか原爆の日」展が、本校にて開かれ、今に続いている。必ずしも生徒たちに関心の高いイベントではないが、回を重ねるうちに胸を打つ作

品が選ばれるようになった。当時校長だった荒木泰俊先生は公募で集まったそれらの作品に感銘を受け、この詩をもとに合唱作品制作の願いを持つこととなる。そしてこの思いは2017年国立市の委嘱で、沖縄の作曲家瑞慶覧尚子さんによる合唱曲「祈る日」の誕生に結実したのである。感動的でメッセージ性の強いこの作品は、平和都市宣言を行なっている国立市に相応しい記念碑的な楽曲となっており、これからも折々に歌い継がれてゆくことだろう。今年2019年10月に「平和首長会議」においても演奏される予定だ。平和首長会議は1982年、当時の荒木武広島市長の呼びかけで世界中に広がった活動で、その目的は世界中から核兵器を廃絶させようというもの。2019年、関東圏では初めて、それも国立市で行われる記念すべき首長会議の開会式に、本校の生徒たちに幕開けの演奏をして貰いたいという依頼を受ける程に、国立市との関わりは深まっている。こうした流れは一朝一夕に形作られるものではなく、各時期に関わられた生徒、先生、保護者の方々のボランティアの賜物であり、脈々と引き継がれここに至ったことを思うと、長きにわたって附属中高の果たしてきた役割の大きさに胸が熱くなる思いだ。これからも国立市はもちろん、それ以外のコミュニティや様々な個人との良好な関係を築き続けてもらいたいと思う。

## 外部活動の活発化

10年以上前から続く活動も幾つかあるが、この10年間に始まった催しへの参加は多い。例えば2015年・2018年に行われた国立アートビエンナーレで、本校教諭だった山本康雄先生の作曲によるテーマ曲「祝祭」が演奏された。また国立市のイルミネーション点灯式での金管楽器によるファンファーレ（これも前出の山本先生の作品）もこの10年間の中で行われるようになったものだ。そうした式や街角で行うクリスマスコンサートでは、コーラスや金管アンサンブルの参加が定着した。そして中学校合唱部は国立国際医療研究

センター病院で4度のコンサートを行い、音楽科は国立駅の nonowa 国立から依頼され、2016年に特急あずさ号運転50周年記念スペシャルライブを、2018年に国立駅前でミニコンサートを行っている。また以前より行なっている音楽科生徒会主催の立川病院コンサート、あおやぎ苑への訪問コンサート、商店街の企画するコンサート、学内で行う地域謝恩コンサート、普通科の吹奏楽部の定期演奏会、ジャズ部の外部音楽祭への出演、チャリティコンサートなど、外部での活動が定期的に安定して行われるようになった10年間でもあった。これらのコンサートが続くのは、生徒、関係者のボランティアと努力の賜物だが、それぞれの場所での演奏を、多くの人たちが感動をもって受け止めてくれていること、そして喜びを演奏者である生徒たちに伝えてくれていること、これが継続への何よりの力となっているのだ。

そして2014年、東京で行われた全国高校インターハイの開会式に、本校の生徒が記念大会のために作曲されたテーマ曲をソロで歌うという、光栄な出来事へと繋がった。2016年からは、本校の合唱指導者である藤原規生先生の仲介により、夏の全国高等学校野球選手権大会東京都大会の開会式の君が代を本校の生徒が独唱するという光栄に浴することとなった。今年2019年も歌うことになっており、これで4年連続高校球児たちの、夏の熱い戦いの幕明けの一端を担うということになった。これは大変名誉ある事で、多くの人たちから導かれ、このような賜物を頂いていると感じるのである。

そして2020年オリンピック・パラリンピックが東京で開催される。附属中高では「東京オリンピック・パラリンピック参加国歌調査演奏プロジェクト」を立ち上げ、生徒たちによる編曲や演奏をDVDに収め、各国の選手団にプレゼントなどしようという応援プロジェクトも進行している。また音楽科、中学の生徒たちの個人による受賞も増加した。音楽での賞はもちろんのこと、書や作文、理科研究などにも受賞の幅が広がっており、生徒たちの活動は正に拡大の一途で、今後も大いに楽しみである。

## 海外交流と留学の活発化

この10年間は、音楽が介在した国際交流が数多くあり、附属中高の内外における活動が驚くほど活発化した期間だったとも言える。

本校の海外での交流演奏会は馬込先生率いる附属高校オーケストラがその皮切りだった。自身もオーストリアを始め、ヨーロッパ各地でオーケストラの団員として、ソリストとして演奏を重ねた経験があるため、海外での交流に対してはその敷居は高いものではなく、むしろ生徒たちに本場の空気を少しでも吸ってもらい、自らの可能性を広げてもらいたいとの思いがそのようにさせたのだろう。これに引き続いて高校合唱部が海外交流演奏会を定期的に行うようになったのだ。夏休みなどを利用した個人的な短期留学などもささやかに行われていたが、2015年から馬込先生の手引きによりアーダルベルト・シュティフター・ギムナジウム（リンツ音楽高校）との変則的な短期交換留学が試験的に始まったことにより、学校でも海外留学への規定が改定され、生徒たちの海外への意識が高まることとなった。リンツ音楽高校には2019年までに5人の生徒が留学を果たしているが、中にはそのまま留まりブルックナー音楽大学へと進学し、ヨーロッパで研鑽を積むものもいた。生徒に本場の音楽や文化を体験してもらうことで、そのモチベーションアップをはかることが目的の一つだが、そのようにヨーロッパで研鑽を積む者が出てくることも想定内の現象と捉えており、リンツ音楽高校との短期交換留学制度は、生徒の音楽への向き合い方に、未来への展望に、大きな影響を与えている事は間違いない。リンツ音楽高校には候補がいれば毎年1名渡欧しており、リンツからは2年に一度優秀生徒が来日して（2017年、2019年）、リサイタルと本校オーケストラとの共演を行うという変則的な交換留学である。現在の状況で両校とも問題なく関係が続けられるという事ならば、正式な留学協定として締結を考える時にきていると思う。そのほか業者と連携して海外短期留学（語学研修）のプログラムを紹介した

り、生徒自身が探してきた留学プログラムを許可したりと、留学関連の動きは加速している。内向きな日本人の若者と言われているが、この中高では、その見解が当て嵌まらないという感想を持つ。そして2010年チェコの少女合唱団「イトロ」の東京公演に高校合唱部が賛助出演した。2013年にはドイツ、ベルリンのカンジウス高校オーケストラが来日。高校オーケストラ有志、高校合唱部と共に、国立オリンピック記念青少年総合センターホールで、「花は咲く」を合同演奏している（2019年も同じ会場で合同演奏会が開かれる）。また2015年、本校卒業生で指揮者として活躍している徳岡直樹氏から、氏が指導している台湾の大成国中学校オーケストラに高校生をソリストとして招聘したいとの話をいただき、本校高校生2名が台湾の中学校オーケストラとピアノコンチェルトを共演するという機会を持った。この後、同校と鳳成国中学の合同オーケストラが来日し、国立音大の講堂で本校高校オーケストラと合同演奏会を行うなどの交流へと展開したのだった。（徳岡氏は2019年も大成国中学のオーケストラを率いて本校を訪れ、交流演奏会を行った）。2015年はリトアニアのヴァルペリス合唱団が来日し、中学校と国立音大講堂小ホールにて交流演奏会を行い、2017年にはチェコの合唱団ボニファンテスが来校し、中高合唱部と合同演奏会を行った。また2016年学園祭が行われている日だったが、ポーランドのザブジェ市長のマウゴジャータさんが表敬訪問され、幾つかの演目をご覧になられた後、茶道部でお点前を体験された。この時感激した市長は必ず歓迎するから、ポーランドに来る時には寄ってもらいたいとの希望を語られ、喜びのうちに附属中高を後にされたことがあった。（その後2018年、中高合唱部がザブジェ市で演奏会を行ない、現地の高校生と交流を深めており、マウゴジャータ市長の温かい歓迎を受けている）。

こうした外国からのゲストは、国立音楽大学関係、オーケストラや合唱部関係で来校しており、このような繋がりが本校にもたらした恩恵は大きい。その中でポーランド文化センターとの

関わりについて少しだけ触れておきたい。本校卒業生の栗原美穂さんはポーランドに留学し、現地でも仕事をされていた。その関係もあり、帰国後はポーランド文化センターに勤めることとなったが、その時の上司がミロスワフ・ブワシチャックさんだった。この方は高校合唱部のヨーロッパ交流演奏旅行をコーディネートしてくれた ICEC 国際文化交流センターと近い方で、現地でもご同行頂き、大使館とのやりとり、ガイドの紹介や交流プログラム関連などで大変ご尽力頂いた方だった。2006、2009、2015、2018 年の 4 回にわたり海外交流演奏会を ICEC さんがコーディネートした関係で、自然にミロスワフさんと合唱部の関係は深まることとなった。そして同窓生である栗原さんが演奏者の 1 人としてポーランド文化センターで職を持っているということで、本校とのパイプがより強くなったという経緯だ。その関係で前述したマウゴジャータ市長、ピョートル・ニキエル氏の民族音楽演奏、マグダレーナ・ズックさんのピアノと歌の演奏、その他多くの外国の方々が来校し、本場の香りを演奏と共に提供してくれる機会が増えたということなのだ。先にも述べたが、こうした地道な交流の積み重ねが多くの人脈となり、本校に様々な形で繋がってきていることを思うと、今後も臆する事なく推進してゆくことは肝要だと思うのである。

この項に付け加える形となるが、中学の音楽コース、音楽科でのレッスン関係では、声楽、イタリア語、合唱、ピアノ、管楽器などの外国の先生方が来校し、生徒たちに感銘深いレッスンを行ってくれている。大学関係者のみならず、実技の先生方の個人的な繋がりなどもあり、優秀で人間的に魅力のある先生方に来ていただけている事は、大変幸運な事だと思う。こうした関係も大切にしていきたいものだ。

以上この 10 年間に起きた事をかいつまんで紹介した。もちろん触れなかったもの、細かく説明できなかったものなど数多く残っている。ただそれらを含めて言える事は、全て繋がってゆくとい

う事。精一杯誠意を持って歩む事で、一人ひとりにも、学校全体にも、そして関わった全ての人たちにも恩恵があるという事だ。最近企業は発想力、コミュニケーション能力、表現力などの力を望む声が増えていると聞いている。これらの力は企業だけが欲しているのではない。むしろ教育とは本来このような力もつけさせるものだろう。今何が大切なのか、今行なっていることの意味は何か、何を吸収するのか、自分はどうしたいのか、どう向き合うべきなのか、こうした問いは子供ならずとも、大人も同じように持つものではないか。その時に自分というものが、しっかりとあるかないかが重要になってくる事は疑いない。この学校は個性を大切に、一人ひとりの考え方や表現を大切にする学園だと思っている。多くの身につけなければならない知識と共に、そうした面を育てあげられる学園であって貰いたいと願っている。

次の 10 年に更なる発展があるように祈りつつ。

## 附属高等学校

### この10年間の取り組み

吉野 康弘 (前副校長 音楽科 26 回生)

ここ十数年来、音楽学校を取り巻く環境は一層厳しいものとなり、将来に於ける音楽学校の使命については全国音楽高等学校協議会でも継続して審議されている。各校とも懸命に生き残りを懸けて様々な施策を実行しているが未だ暗中模索の状態を脱しておらず、社会に於ける音楽学校の存在意義は一部のプロ演奏家の輩出を除いては未確定である。それ故、各音楽学校は生徒募集に腐心する状態が続いている。現在、多くの音楽学校は前世紀の一億総中流時代の名残である、幼少期からの習い事の上に成り立っている特殊な教育機関と云える。音楽学校へ入学するためには長い期間毎週のようにレッスンへ通い、更には入試課題である聴音等、ソルフェージュのレッスンにも定期的に通い続けなければならず、受験生保護者の経済的負担が大きいばかりか、そのレッスンでさえも幼少期からの惰性とも云える習慣的学習の上に成立するのが主流であり、子供の意志による興味判断能力のつく中学生時期での音楽高校への進学を選択する事自体手遅れであると進学を断念するケースも多々見受けられた。

本校ではこのような受験者層をサポートするために2007年より「KUNIONへの道」、後の「KUNION講座」を開講した。これは月2回土曜日に実施し、各専攻レッスンやソルフェージュの授業を受験希望者に対し無料で行うというものであった。受験生確保が主眼ではあったが、講座には本校志望者対象の「専願コース」と、必ずしもそうでない受験生対象の「Basicコース」の2コースを開設し、他音楽高校受験生にも門戸を広げた。これが、くにたちの文化である。受講生は最大80から100名に達した。その後他校も追従し、同様の企画が相次ぐこととなり、「KUNION講座」は閉講し、現在行われている体験型講座「くにたち de ☆Start」に移行した。当講座は年に4～5回

開講され、作曲家で本校教諭でもあった山本康雄氏による斬新なアイデアの切り口による音楽体験授業が非常に印象的であった。

入学試験に於いても、過去数十年に渡り続けてきた入試方法を見直すべく入試改革を行なった。少子化による受験生の音楽実技力・学力低下が著しく目立ってきたのも要因の一つであった。中学生という学齢に達し自身の知的好奇心や知的学力の下、自分の進路を自ら決断できる生徒こそが本校の求める生徒像である。前述したように音楽の習慣的学習歴のない生徒であっても知的学力が担保されたこのような生徒たちには門戸を開くことが、学校の将来、生徒のレベル向上にも繋がるという確信の下、調査書重視及び併用型入試を導入した。また、この動きに呼応し、2017年6月より安価な料金設定で専門的な音楽教育を目指す附属中学高等学校併設音楽教室「Music atelier」を開設した。同時に高校普通科から国立音楽大学を志望する生徒のためにピアノと声楽の「アフタースクール」も開講。これらの施策により2018年度音楽科入試においては定員を上回る106名の新入生を迎えることができた。

一方、在校生に対しては幼児教育志望者に対し、附属幼稚園の山下郁子副園長による事前レクチャーを含む、幼稚園体験実習を附属幼稚園と連携し、企画・実行。さらに、音楽学習希望の園児に対し、附属中高及び小学校より実技レッスン担当教員を派遣しての園内レッスン(ピアノ・ヴァイオリン)を実現した。

附属間の緊密な連携を図ることが可能となったからには、上級校それぞれが独自の魅力を持ち、また、そこに在職する教師一人ひとりがいかに使命を果たし、他に類を見ない魅力的な仕事をするかが求められる。もはや、伝統やブランドは通用しない。本校で習得する音楽の包括的学習こそが、将来社会に還元するための分析力、発想力、そして継続力を培うことができ、かつて中教審が提唱した「生きる力」の本意に繋がるのではないか。今後の若い力に期待したい。



## 高校普通科のコース制と 中学のプログラム制について

高校普通科は2004年より他大学進学を視野に入れた新しい形での普通科としてスタートをし、選択授業や土曜講習を充実させ、一人ひとりに向き合う少人数教育を売りにしてきた。国立音楽大学の附属としての普通科を浸透させることは容易なことではなく、なかなか安定した生徒数を確保できていなかった。しかし、そのような中、生徒の進学へのニーズは多様化しており、学力層も幅広いものになってきていた。そこで、2017年度より総合進学コースと特別選抜コースの2コース制へと舵を切った。

総合進学コースは推薦入試やAO入試に強いコースを目指している。本校は現在、中央大学、成蹊大学、成城大学など80大学300学科分の指定校推薦大学を有している。これは今までの卒業生が頑張ってきた成果といえよう。また国立音楽大学への内部推薦も有しており、演奏創作学科ではコンピュータ音楽専修、音楽教育学科の全専攻が対象となっており、例年15%程度が推薦で進学している。2020年からの新大学入試への対応を見据え、2019年度より「自ら考え、表現する」アクティブラーニング型の授業を総合学習として取り入れている。

特別進学コースは国公立難関私立大学進学を目指している。特別進学コースを開設するにあたり、プラスティー教育研究所代表の清水章弘氏の協力を得ることとした。単に授業を聞くだけ、問題を解くだけでは学習にはなり得ない。わからないことをわかるようにしてこそ学習である。いたってシンプルなことではあるが、自らが学習方法を作り出し、学習していくことは容易ではない。そこで日々の学習状況や生活状況をコーチングしていく伴走者が必要である。その学習コーチングをしていくのがプラスティーという教育集団である。月3回程度土曜日に英語・国語・数学の講習と個々へのコーチングを行っている。長期休暇中の講習と合わせ、年間180コマの授業・コーチングが

行われている。また、月に2回、特進の担任と情報共有会を開いており、そこで生徒個々の学習状況が共有されている。生徒は全体的に着実に伸びてきており、今後のより一層の成長が期待できる。本来、学校の善し悪しは偏差値や進学結果で決まるものではない。生徒が如何に充実した学校生活を送り、成長しているかで決まるのであろう。とはいえ、生徒が希望している進路を実現させていかねば最終的に満足にはつながらないのではないかと。私たち教職員は実力向上を目指し、専心努力しなければならない。

中学校は附属小学校からの要請もあり、従来からある音楽分野を目指す生徒だけではない生徒を受け入れるべく、2011年に普通コースを開設した。普通コース開設当初より普通コースとは何かという声は多く、音楽コースとの明確な違いもなかなか世間で浸透しにくかった。普通コース開設から9年が経ち、高校普通科の2コース制の流れの中、2019年度より普通コースを文理コースと改称し、総合プログラムと特別選抜プログラムの2プログラム制とした。総合プログラムは普通科総合進学コースへの進学を目指し、基礎的な学力を定着させることを目標としている。また、特別選抜プログラムは普通科特別進学コースで大きく飛躍すべく、より深く学び、実力を養成していくことを目標としている。特別選抜プログラムは普通科特別進学コース同様、プラスティーによる学習コーチングを実施している。そして音楽コースの生徒でも附属小学校からの推薦者、入学試験での成績上位者は特別選抜プログラムを受講することが可能である。「音楽をしっかりとやりたいし、学習ももっと頑張りたい」という生徒のニーズに応えられる形になっている。本校の強みはまだ将来像がぼんやりしている生徒たちが進路変更をしたい時にそれを叶えることができるプログラムやコースがあることである。この強みは今後もしっかり継続し、生徒の満足度が上がる学校にしていきたい。

音楽コースも2019年より音楽実技プログラムと音楽準備プログラムの2プログラム制にすると

いう新たな改革を行っている。音楽準備プログラムは、以前よりこれから声楽を学びたい生徒に開設していた音楽コース内にある声楽準備を拡大し、鍵盤楽器を除く楽器・声楽を対象とした。この改革は高校音楽科の入試改革（実技なし入試の実施）と同様、中高6年間で基礎からしっかり育てようという思い、音楽を目指す生徒を掘り起こそうという思いで実現した。2020年度からは鍵盤楽器も音楽準備プログラム可能とし、すべての楽器・声楽での入学が可能となった。音楽準備プログラムで入学した生徒は1年間、レッスンでしっかり基礎的な技量を磨き、中学2年次より音楽実技プログラムに合流する。

国際化、情報化は急速に進展し、社会構造も大きく変化していくであろう。予想される変化の中

でこれからの社会を担う中高生への教育活動も改革が求められており、2021年度から大学入試も大きく変わる。この教育改革は「学力の3要素」をバランス良く育てるという目的下にある。学力の3要素とは①知識や技能が十分にあること②それを基に答えが1つではない問題に自らの解を見出していく「思考力・表現力・判断力」があること③主体性をもって他者と協働する力があることだ。「音楽」を用いて、「英語」を用いて、「数学」を用いて等々、手法に違いはあれ、進む道は同じである。「自由・自主・自律」の精神の下、「他者を思いやり、主体的に考える」力を育成し、これからの社会で活躍できるよう、教職員一同、取り組んでいきたい。

副校長 滝澤 秀



## 音小中交流会について

星野 安彦

小学校は以前より、幼稚園との関わりは幼小委員会というものがあり、初等教育について共同で意見交換、研究を行ってきた経緯があった。しかし、中学校とはそういった公の委員会は存在せず、小学校と中学校の関わりの初めは「きりたんぼの会」という、秋田名物を共に作り食すという、限られた教員同士の交流であった。

そこで、小中の関係も幼稚園と小学校のような関係が必要ではないかという意見から、2000年～2005年頃、小学校と中学校の教員数名が中心となり教育に関する意見交換の交流が始まった。当初は音小から音中に入学した生徒の様子を話したり、教員同士がスポーツで交流をする程度だったが、徐々に音小から音中へ進学した生徒の成長と頑張りをぜひ後輩にもみせられないものか、また、くにたち音楽会で発表する曲を一回きりの発表で終わらせるのはもったいないので、ぜひ小学生にも披露できないかということで、小学校に中学生の合唱やブラスバンド、教員が訪問し、ミニ演奏会を楽しんでもらう形の交流会を行うようになって

いった。

2010年から2013年までは、開催場所を小学校と中学校を交互に設定していたが、2014年以降、小学生に中学校へ来てもらう形の方が、より柔軟なプログラムが考えられることと、ブラスバンドの楽器運搬などの手間も省けることなどがあり、中学校に4～6年生の小学生を招く現在の形へと移行していった。

交流会の内容も2015年までは演奏会が中心の交流会であったが、2016年より、4年生と5・6年生を分けて、4年生は体育館での楽器を使ったクイズ交流会、5・6年生はスタジオでのソロ演奏・合奏・合唱の演奏交流会を行う現在の形になっていった。

近年は、生徒会と実行委員が中心となって企画を考え、自主的に行動し、交流会を成功に導けるよう行っている。



音小中交流会

## 音楽科の変革について

### ～ 入試改革、ピアノグレード制 ～

#### 1 入試改革とカリキュラム改訂

##### 歯止めがかからない受験者数減

少子化の影響は長引く不況とともに全国の学校にじわじわと深刻な影響を与え、中でも音楽大学・高校は50年近く続いた“音楽バブル”の終焉も相まって大きな打撃を受け続けている。本校音楽科も1995年頃から生徒数が減少を続け、2006年度入学生から3クラスとなり、さらに2015年度入学生はついに普通科入学生数を下回って2クラス編成となった。

多くの私立高校が定員割れし、「高校全入時代」とも言われ始めていたことは、受験生にとって有利なようにも思われたが、逆に受験生の保護者や中学校の担任教員にとっては失敗が許されないという重圧を生んだようでもあった。当時学校説明会や「KUNION 講座」で受験生保護者と接する中でもこのことを肌で感じる事が多く、面談を重ねて内申点を確認し、実技でも合格の可能性が高いことを説明しても、入試当日の実技試験のでき次第で不合格となる僅かなリスクを回避するため、推薦での受験をあきらめてしまうケースが散見されていた。「ダメでもともと」「推薦で落ちたら一般で」といった大らかな時代ではなくなったのである。

##### 新入試制度と新カリキュラム

このような生徒が安心して受験でき、またこれから本格的な音楽の勉強を始めようという受験生にも本校でのびのびと音楽を勉強してもらうため、2015年夏から急遽検討されたのが“実技なし入試”である。一定の学業成績があることのみを条件とし、出願に際し受験生本人を直接指導した音楽教員の「音楽推薦書」を添えれば、推薦入試において専攻実技、聴音、副科ピアノの試験を免除する

という画期的なものであった。

ここで重要なのが、並行して行われたカリキュラム改革である。楽器を弾いたことがない生徒、五線譜の意味を理解しない生徒が入学する可能性が理論上あり得ることを踏まえ、そうした生徒を3年間で音楽大学入学レベルまで引き上げる体制の整備が急務となったのだ。

折しもこの頃は2016年度実施を目指して2014年には作成が着手されていた新カリキュラムの概要がほぼ出来上がっていたところだった。もともと個人の習熟度の差に対応することが新カリキュラムの主眼のひとつであったので、新しい入試制度に対しては運用の範囲で十分対応できるものだった。初歩段階の生徒に効率的に力をつけさせ、一方で高い能力を持つ生徒をさらに伸ばすことを同時に行うことは、60年以上に渡って独自の（そして最高レベルの！）教育体系を積み上げてきた本校の理論・ソルフェージュスタッフにとって、正に得意分野であったのだ。必修の「音楽理論」「ソルフェージュ」の授業をそれぞれ入学時から4段階、7段階のグレードに分けて行い、さらに音楽、一般教科から習熟度や進路、意欲に応じて多様に選べる選択授業を用意した新カリキュラムが完成したのである。

##### 定着と課題

2017年度入試では推薦入試を「実技型」「調査書併用型」「調査書重視型」の三つの型に整備し、さらに推薦入試実技型と一般入試で必要だった「聴音」「副科ピアノ」を必須とせず、「視唱（または視奏）」と併せた3つから任意の一つを選択できる「選択実技」として課すこととした（ピアノ専攻は「聴音」「視唱・視奏」から一つを選択）。

この改革は当初受験生や保護者から多少の戸惑いをもって受け入れられていたようだったが、入りやすくなったと見える部分だけでなく、入ってから安心して個々の力を伸ばせる体制を整えたことを説明会等で丁寧に説明した成果はすぐにあらわれた。2016年度入試からは受験生数が2010

年ころの水準に戻り、3クラス体制を1年で復活させることができた。新カリキュラムも2016年度入学生から移行を開始し、移行が完了した2018年春までには、新しい入試型の呼称も受験生の間で定着したようであった。

この新しい入試制度導入による生徒のレベル低下を懸念する声が、教員間や同窓会員から聞かれていたのも事実である。しかし、クラシックのレッスンを受けたことがない状態でピアノ専攻として入学した生徒が努力を重ねて国立音楽大学に推薦入学を果たし、またある生徒は在校中に全日本学生音楽コンクールで全国大会第1位を受賞するなど（いずれも実技なし入試で入学した生徒）、生徒たちはそれぞれの学びの中で着実に成果を上げている。もちろん他の様々な要因もあり、生徒たちの質が20年前、30年前と全く同じと言える訳ではないが、この入試制度導入が原因と思われる明らかな変化は見られず、音高生の気質・能力は基本的に受け継がれているというのが筆者の感触である。

ただしこれで当面受験生確保、レベル維持は安泰、ということでは当然あり得ない。音楽が社会に果たす役割、子供たちをとりまく環境は今まで以上に急速に変化してゆくであろう。その中で何を堅持し、何を改革して行くかを誤らずに選択して行く見識と行動力、そして何より充実した教育を行うことがますます重要になるものと考えます。

## 2 ピアノ専攻におけるグレード制

24名（2019年現在）の教員を擁する本校ピアノ部会は21世紀に入って世代交代が大きく進み、意識改革や教育内容の見直しが精力的に行われるようになった。若手教員たちは有志で検討グループを結成し、実技試験の課題のあり方や評価の方法、さらには教員が日々のレッスンで抱える悩みまで、毎週のように話し合い、その結果を部会議に報告、さらに検討を加えて改善を図るといったことを継続的に行ったのである。

その成果の一つが2009年度から実施している

「トライアル」である。ピアノ教員数名で結成される「チーム」によって年3回実施するトライアルは、練習曲やJ.S. バッハの作品のほか、指定されたスケールやアルペジオを生徒が演奏してその評価を記録し、さらに複数の教員が直接その場で口頭のアドバイスをするというものである。生徒にとって基礎力の継続的な学びの場となっているこの取り組みは、レッスンの結果である生徒の演奏に対し忌憚なく意見を出し合うという、教員にとっての相互研修の場にもなっている。とかく旧来の閉鎖的な徒弟制の風習が残りやすい音楽学校に於いてこのようにオープンな形で教育が行われ、それを日常的な環境として勉強する生徒たちの姿は、他の音楽大学、音楽高校関係者から大きな驚きをもって注目されることとなった。またこの取り組みは弦楽部会にも波及し、現在弦楽器でも年2回のトライアルを行っている。

ピアノ部会が次に行った大きな改革は、トライアル実施からさらに検討を重ねて2016年度に実施に漕ぎ着けたグレード制の導入である。その主な概要は次のようなものである。

- ・附属中学校を含めた12段階。
- ・約3000曲を掲載した「グレード別楽曲一覧」を独自に作成、配布。
- ・上位グレードでは定められた演奏時間で自由プログラムによる演奏を行う（Kグレードは15分以上、Lグレードは30分以上）。
- ・一度試験で演奏した曲は次回以降の試験で演奏できない。
- ・試験後5段階評価の他に、新しいグレードが通知される。



グレード別楽曲一覧

音楽実技は元来点数化、ましてや5段階評価に完全になじむものではないが、学校である以上評価を出すことは避けられない。そのため本校ピアノ試験では基準を統一するため1つの学年全員に同じ曲を課し、評価することを長年続け、やがて選択肢を少し広げて2～数曲の課題から1曲を選んで演奏する、というスタイルが定着していた。しかしそこには曲の難易度と採点基準の関係があいまいになりやすいという問題が内在しており、さらに近年では生徒の個人差が大きくなり、数曲の試験課題ではカバーしきれない状態にもなっていた。

そこで、個々の生徒が自分で試験曲を選ぶことができ、さらに精密な採点基準を設けることで公平に近い形での評価も可能とする方法として考案されたのが、このグレード制である。これにより、ピアノ奏者として学習しておくべき基本的な楽曲から個々の生徒の特性を生かす楽曲まで、3年間または6年間を見据えて幅広くレパートリー構築をすることができるようになった。毎回の実技試験ではそのプランの中で生徒の現状にあった学習効果の高い選曲ができるのである。

しかし一方で、一部生徒や保護者がグレードの上がり下がりにより神経を尖らせているという状況も残念ながら耳にする。この制度は生徒をランク付けするものではなく、あくまで生徒の特質、習熟度に合わせて達成感を共有しながら演奏技術と表現力を効果的に指導するためのものである。もし1年、1年半と同じグレードに留まったとしても、それはそのグレードが生徒の現状に合っているということで、そのグレードにある多くの名曲をじっくりと勉強する期間は将来必ずプラスになるはずなのだ。半年ごとにグレードをどんどん通過して行くことの方がむしろ少し心配なくらいである。グレード制の本来の趣旨が十分理解されるよう、今後も繰り返し説明して行くことが肝要であろう。

導入して4年が経過したこのピアノグレード制は、一定の成果を上げているとは言え、システム全体は未だ完成を見てはいない。グレード上下のバランス、楽曲一覧の見直しなど、細かな修正を加えながらさらに生徒に寄り添い、充実したものとなることを期待したい。

米持 隆之



## ソロ・アンサンブル 定期演奏会について ～ 中止に至る経緯と遺したもの ～

ソロ・アンサンブル定期演奏会は、招待演奏会と同じく2005年に国立音大創立80周年記念事業の一つとして始まった演奏会である。ソロや少人数のアンサンブルの演奏に適した都内の会場を使用し、6～7組の生徒に十分な演奏時間を与えて、じっくり鑑賞するこの演奏会は、コンサートの一つの理想を具現化したものであった。演奏できるレパートリーは大きく広がり、曲によってはソナタの全楽章を演奏できるようになった上、音楽の文脈を崩すカットや抜粋からも解放された出演生徒たちは、のびのびとした演奏を披露した。多く

の演奏会に携わってきたホールスタッフからレベルの高さを称賛されたほどであったことは、60周年記念誌でも紹介した通りである。

しかしこの演奏会も、入場者数の確保という課題を開始当初から背負うこととなった。もともと学校行事や音楽会の多い秋に2つの演奏会が新たに加わったことで生徒や保護者の動きは分散してしまう傾向があった。出演者が少ないということは関係者も少ないということで、いかに演奏が良質でも、また会場のトッパンホールがいかに素晴らしいホールでも、多摩地区からのアクセスが良好とは言えないこの会場の約400席が、6割を超える聴衆で埋まることはなかった。

こういった実情を踏まえて2009年の音楽部会では、乱立気味の演奏会の整理が議題となり、こ

のソロ・アンサンブル定期演奏会が廃止すべき候補の筆頭に挙げられることとなった。この演奏会発足の立役者であった当時の荒木副校長は最後まで存続を主張されていたが、「くにたち音楽会」の「ソロ・アンサンブルの部」をこれに代わる演奏会と位置づけ、オーディションによる出演者の選出、会場の厳選など、ソロ・アンサンブル定期演奏会の理念、運営方法を受け継ぐものとして改革することを条件に最終的に廃止を承諾され、ソロ・アンサンブル定期演奏会は2009年の第5回を最後に中止することが決定したのである。

そもそもソロ・アンサンブル定期演奏会発足は、長大な時間を要しながら演奏者一人あたりの演奏時間が短いという、「くにたち音楽会」の「ソロ・アンサンブルの部」が抱えていた諸問題を解決することが大きな目的の一つだったのだ。この原点に立ち返って再検討がなされた結果、以下のようなことが確認された。

- 1 会場を国立音楽大学講堂小ホールとする。  
(大きな会場を使わざるを得なかった要因の中学生と高校音楽科生徒への鑑賞義務付けを廃止する。)
- 2 高校音楽科出演生徒は前期実技試験各専攻の成績上位者によるオーディションを行って選出する。管打楽器専攻1, 2年生は前期試験を行わないので別途オーディションを行って候補を選出し、他の専攻も必要に応じ予備オーディションを実施する。
- 3 中学生出演者は3年生前期実技試験上位者から選出する。

その他、高校生の持ち時間を10～15分（声楽は8～10分）程度とすること、演奏会全体を2時間20分程度に収めるなどの確認が行われ、微調整を行いながら現在に至っている。

中学生が出演するため全体の所要時間は「ソロ・室内楽定期演奏会」より若干増えたが、それ以外の部分では定期演奏会のエッセンスがそのまま生かされ、完成度の高い演奏会が実現されたのだ。「第58回くにたち音楽会（2010年12月）」は内容を一新したばかりでなく、ほぼ満席となった聴

衆の集中度もそれまでと大きく変わり、また音大講堂小ホールの音響の良さ、機能の高さを再発見する機会ともなったのである。

その後の「くにたち音楽会」もこの方法を踏襲して行われて現在に至っており、レベル維持、来場者確保とも概ね安定して運営されている。

僅かな回数で中止することとなってしまった「ソロ・アンサンブル定期演奏会」ではあるが、その理想を求める精神と、関わった教員、出演した生徒たちの熱意はこれからも後輩たちに受け継がれ、生き続けてゆくものと思われる。

米持 隆之

## アンサンブル・ランチコンサートについて

2017年より、校内での生徒演奏活動活発化の一環として「アンサンブル・ランチコンサート」を行っている。

内容は、年3回（6月、12月、2月）3号館生徒ホールにて、昼休み（12時40分～13時25分）の時間を使った20分ほどの生徒によるコンサート。中学生・高校音楽科・高校普通科を問わず参加可能であり、本番約2週間前に行う学内オーディションを合格したグループが出演する。

1回の演奏会で、2組～4組のグループが演奏している。

＜参加オーディション内容＞

演奏形態：ピアノまたは電子オルガンを含む3重奏・3重唱以上のアンサンブル または、ピアノを含まない2重奏・2重唱以上のアンサンブル または、電子オルガン2台

演奏時間：各組10分以内

演奏曲目：クラシックの作品に限る

## 経緯

学習指導要領カリキュラム改訂により高等学校において演奏法の授業が必修となった。本校では、その演奏法の授業を5年前より演奏研究と鑑賞研究の2つの授業に分けて行っている。

演奏研究は音楽科3年生対象の授業、鑑賞研究は、音楽科2年生対象の授業となっている。現在、鑑賞研究は、古典派、ロマン派、フランス近代の3クラスに分け、その時代のピアノ作品を取り上げ、研究・演奏する授業の他、アンサンブルでは、器楽、声楽2クラスに分け、3重奏以上の様々な楽器によるアンサンブル作品を取り上げて行う器楽アンサンブル、また重唱を取り上げた声楽アンサンブル、計5クラスで授業を行っている。

「アンサンブル・ランチコンサート」は、アンサンブルが授業に組み込まれたことで、その学習成

果発表の場を設けることと、また生徒全体へ広くアンサンブルという音楽を周知していくことを兼ねて始めた演奏会である。

## 目的と展望

将来、演奏家という職業を選択したならば、アンサンブルは必要不可欠なものである。そのため本校では中高生の中からアンサンブルを学ぶことを推奨し、将来の音楽活動に繋がるよう、積極的に演奏する機会を作っている。

## 成果

「アンサンブル・ランチコンサート」を始めた当初は、高校生のみでの出演が殆どだったが、現在では中学生も積極的に参加しており、中学1年生から高校3年生までの6学年の出演者で行う演奏会となっている。

入学間もない中学1年生も、上級生の演奏を聴いて刺激を受け、アンサンブルに興味を持ち積極的に演奏会に参加しようと意欲をもって頑張っている姿が見られる。

また、日頃昼食で利用している3号館生徒ホールで行っていることも、音楽を身近に感じられるとともに、音楽コース以外の生徒達にもよりよい刺激となり、学内全体の一層の活性化につながっているようだ。

菊地 珠里



アンサンブル・ランチコンサート

## ソロ伊斯ツ・ランチコンサートについて

年2回(6月、11月)3号館生徒ホールにて、昼休み(12時40分~13時25分)の時間を使った20分ほどの本校教員による演奏会。2017年より行っている。

### 目的

生徒による「アンサンブル・ランチコンサート」の開催に伴い、毎日通う学校という最も身近な場で、気楽に教員の演奏が聴ける機会を設けようという目的による。20分程の短い時間だが、昼休みの時間を使って教員によるミニコンサート(2組の演奏)を開催し、日頃レッスンや授業で教わっている教員が本番の舞台に立つ姿と、本番までの過程を間近で見ること、生徒達が刺激を受け、より一層意欲をもって勉強していくきっかけになればという思いから計画された。

2019年度は、6月26日(水)に、第4回ソロ伊斯ツ・ランチコンサートが行われた。

出演者と演奏曲名は以下のとおりである。

\*ピアノ 日下知奈先生

シューマン作曲 森の情景より

\*ヴァイオリン 小林倫子先生

バルトーク作曲

無伴奏ヴァイオリン・ソナタより

### 教員による演奏会 前史

元々、「ソロ伊斯ツ・コンサート」と題された演奏会は、1996年に荒木泰俊前校長、吉野康弘前副校長により発足された、本校術科教員、音楽教員が出演する演奏会として、外部のホールで開催されていた。生徒一人一人に、質の高い教育を行っていくためには、教員側も常に勉強を続け、技術を向上させていかなければいけないという目的のもと発足し、現在に至る。

第1回「ソロ伊斯ツ・コンサート」は、1996年6月7日三鷹市芸術文化センター風のホールで、行われた。以降、継続して三鷹市芸術文化センターにて、年に1回もしくは2回開催している。こちらはリサイタル形式の演奏会で、ランチコンサートのような気軽さはない正式なものであり、こうした演奏する場のバリエーションも生徒達に伝えるべきことであるだろう。

### 成果

本番を終えると、関心を持った生徒達からいつも色々な質問や感想を受ける。演奏当日までの準備のしかたや、本番での緊張をどうコントロールするか、などの演奏家の本質に触れる質問が出ることは頼もしく感じられる。また、教員が演奏家の本音を漏らすこともあり、なかなか得がたいコミュニケーションが図られるケースもある。また演奏会で様々な作品に触れ、いつか自分も演奏してみたいなどの憧れを持つこと、それを目標にして頑張ろうとする姿も見受けられるなど、成果が出始めている。

菊地 珠里



ソロ伊斯ツ・ランチコンサート 小宮康裕講師



# 地域と学校

## 招待演奏会について ～ 第12回までとその後 ～

招待演奏会は、将来の活躍が期待される高校生に演奏の場を提供し、本校と「文教都市くにたち」との交流を広めることを目的とし、大学創立80周年記念事業のひとつとして2005年に第1回が開催された。東京近郊の音楽高校から1組ずつ派遣してもらい、本校からも1～2組が出演する形で行うこの演奏会は、国立市から「共催」という形で支援をいただき、街のシンボルとも言える一橋大学兼松講堂を会場として、以後毎年秋に開催されてきた。

1000人近くを集めた第1回以降入場者数は減少傾向が続いたが、第7回頃からは徐々に回復し、500～600名の入場者数で安定していた。とくに2017年の第12回は台風が間近に迫る大雨の中での開催となったが、それでも客足が大きく落ちることはなかったことを考えると、この演奏会が多くの人々や愛好家の方々に認知され、開催を楽しみにして下さる「常連」の方が一定数形成されていたことを窺わせた。

一方運営面で振り返ると、毎年多くの課題を残しながら進んでいたのが実態であった。

まず、会場の兼松講堂にはリハーサル室がないので、出演者には朝まず本校に練習に来ていただき、その後会場と本校とを頻りに移動していただく必要があった。本校が手配する車での移動時間は数分ではあったが、どうしても時間のロスがあるので出演者には本番の5時間程前に本校に来てもらうことになり、長い拘束時間が負担となっていた。

また、演奏会の準備、運営をする本校教員・演奏会委員生徒への負担も相当なものだった。

朝8時30分に会場に入る現地組の最初の仕事は、およそ2時間かけての掃除である。公共、民間を問わずこうした演奏会場は基本的な清掃は行き届いているのが通常だが、ここは例外のようで、行ってみると棧や窓枠には埃が厚く積もっていて所々に蜘蛛の巣が張っている、という状況であっ

た。従って前日までに用意する学校からの搬入物には、譜面台や立て看板、受付用の文房具などと併せてほうきやバケツ、雑巾、トイレブラシ、ゴム手袋等多くの清掃用具を積み込む必要があった。教員、演奏会委員生徒で手分けして7か所のトイレを清掃し、そのあと楽屋や客席、ロビーや廊下、そして外回りまで行うのだが、前に使用した団体が放置したと思われる飲食物のゴミなどを処分することもしばしばあった。

そのほか音響、照明の操作のしにくさ、ロビーの狭さによる雨天時の対応の難しさなど、通常の演奏会場では必要ないと思われる準備、手配は枚挙にいとまがない。

そして本校生徒、保護者の関心について言えば、残念ながら結果的にはいま一つの盛り上がりであったと言わざるを得ない。秋は9月の芸術祭に始まり他の演奏会、外部での鑑賞行事、宿泊行事、さらに中間試験などがあり、この演奏会が素晴らしい演奏会であることはわかっているにもかかわらず、足が向きにくいというのが実態であったようだ。

出演者の負担、本校教員生徒の負担、伸びきらない集客、高額な会場使用料等の問題が顕在化してきたため、第10回が終わった2015年冬頃から招待演奏会の今後のあり方について校長を中心に少しずつ検討が行われた。その結果2018年度は開催を一旦休止し、以後隔年や3年に1度などの実施も含め継続して検討することとなった。そして創立70周年にあたる本年(2019年)も周年行事としての演奏会が別途実施されるため、招待演奏会の開催は見送りとなり、現在に至っている。

会場の格式を優先するか使い易さを優先するか、出演者やスタッフの負担、コストをどうコントロールするかは今後の議論に委ねられている。

このステージから巣立った若者たちはその後多くの演奏会や国際コンクール(この原稿執筆中に第11回に出演した藤田真央さんがチャイコフスキー国際コンクールピアノ部門第2位入賞!のニュースが飛び込んできた)で活躍しており、音楽雑誌や演奏会のプログラムで見覚えのある名前を見かけることもしばしばである。自身のプロ

フィール欄にこの招演奏会に出演したことを載せているケースもあり、彼らにとっても一つのステータスとなっているようである。

他校からの出演者は兼松のステージに立った日、同じ音楽を学ぶ高校生たちが何時間も前に会場入りし、ゴム手袋をしてトイレを磨いていたとは夢にも思わなかっただろう。そのことにいつか思い至る人もいれば、至らない人もいるかも知れない。しかし、見返りを一切意に介さずに働き、当日の清掃ばかりでなく受付や会場案内等でも的確な対応力を見せた本校生徒たちのこの姿こそが、くにたちの底力ではないだろうか。演奏した本校生徒はもちろん、スタッフとして参加した彼ら彼女らは今後間違いなく国内外の音楽文化を力強く支えリードする人材となって、それぞれの持ち場で良い働きをしてくれるものと信じている。

米持 隆之

#### 招待演奏会の記録

西暦	平成	回数	会場	開催日	備 考
2009	21	5	一橋大学 兼松講堂	10月18日	60周年記念誌は第4回まで掲載
2010	22	6	一橋大学 兼松講堂	10月3日	
2011	23	7	一橋大学 兼松講堂	10月2日	
2012	24	8	一橋大学 兼松講堂	10月8日	
2013	25	9	一橋大学 兼松講堂	10月6日	
2014	26	10	一橋大学 兼松講堂	11月8日	第10回記念特別演奏(第1回演奏会出演者による)
2015	27	11	一橋大学 兼松講堂	11月8日	
2016	28	12	一橋大学 兼松講堂	10月16日	
2017	29	13	一橋大学 兼松講堂	10月22日	

## 音楽科生徒による出張コンサート

ここ10年で、本校生徒による校外での演奏の場を、あちこちからいただけるようになりました。もちろん、それまでも「合唱部」や「ブラスバンド部」が部活単位で活躍していましたが、今回のお話は部活動単位ではなく、生徒会が考案し、開催までこぎ着けたコンサートからスタートします。生徒指導部の教員として、ずっと生徒達と一緒に企画、運営してきた立場から、覚え書きとして残していただければと、この度、記事にさせていただきました。

きっかけは、2008年に生徒会と当時の撰梅校長との話し合いにより実現した「地域謝恩コンサート」です。本校生徒として、何か地域の皆様に対してできることはないか？と考えた生徒会メンバーが、校長と相談し、はじめの一歩として本校で生徒会主催の自主コンサート「地域謝恩コンサート」を2009年3月中旬に本校講堂で開催しました。学校の実技試験の成績で選ばれる校内の演奏会だけではなく、やる気がある有志の発表の場を作りたいという生徒達の強い思いを感じたものです。もちろん人前で演奏するので、「きちんと仕上がった演奏」をお贈りしなくてはなりませんから、オーディションで出演者を決定しましたが、「誰でもエントリーできるオーディション」という点が生徒達にとっては嬉しかったようです。地域の皆様に向けた未就学児大歓迎のコンサートということにしたので、当日は赤ちゃん連れのご家族もいらしてくださいました。生徒達が事前にチラシを配布したり、地元の商店会にポスターを貼っていただいたりしたので、予想以上に多くのお客様にお運びいただき、和やかな雰囲気の中で初回のコンサートは成功しました。

この「謝恩コンサート」成功をきっかけに、生徒会は、外部でのボランティアコンサート開催を提案してきました。演奏の場を提供して下さる場所を探すために、教員と生徒でいろいろなところに電話をして交渉しました。その結果、立川市の国家公務員共済組合連合会立川病院からオ

ファーをいただき、2010年12月、院内クリスマスコンサートを開催していただけることとなったのです。立川病院は、以前からクリスマスコンサートを行っていたそうですが、それまでは出演者が「年配の」大正琴のサークルやコーラスのコンサートだったとのこと。病院サイドとしては、もっと若さ溢れるコンサートを開催して患者様に元気をもらいたい、と考えていて、お互いの条件がぴったりに合った形での開催となりました。



立川病院出張クリスマスコンサート

ところが、ここで大きな問題が持ち上がりました。病院にはピアノがないのです。ピアノを一切使わないコンサートプログラムを生徒達だけで企画するのは大変難しく、困惑していたところ、校長が「学校でピアノ運送費の半額を出すから、生徒会で何とか半額工面して、是非コンサートを成功に導こうではないか」と、実現に向けて一歩踏み出してくれたのです。突然の事で、学校として予算も申請していない中を、生徒達のやる気を最優先に考え、無理を承知で動いてくれた撰梅校長に生徒達は感激し、コンサート成功に向けて演奏者も企画者も最大限の力を出し切り、無事に本番までこぎ着ける事が出来ました。

当日は、まず学校からグランドピアノを分解して業者に運んでもらい、病院に搬入して組み立て、調律を行い、本番に臨みました。土曜日の診療が終わったあとの開催で、本番は15時30分から。普段、受付や支払いを行っている場所での演奏で、決して音響が良いわけでもありませんが、病院の職員の方々と生徒会役員が早めに集合し、協力して場所のセッティングを行い、ロビーコンサート

の会場が見事に出来上がりました。開演 10 分前くらいから、病棟の患者様たちが続々とコンサート会場に集まってきました。一人で歩ける方だけでなく、車いすや寝台で、看護師さんやご家族付き添いで聴きに来てくれた方も大勢います。本番は、準備した椅子だけでは足りず、ドクターや看護師さん達は立ち見状態でした。途中で点滴切れの警報音が鳴ったり、ドクターの院内 PHS が鳴ったり、演奏する生徒にとってはとてもドキドキしながらの演奏だったことと思います。コンサートが終わると、沢山の患者様が生徒達に「ありがとう」と声をかけて下さいました。自分たちの気持ちが、皆様に伝わったと実感できた瞬間でした。

初回のコンサートには後日談があります。後に学校宛てに匿名の手紙が 2 通届きました。差出人は「立川病院入院患者より」と「80 代の男性より」でした。お一人目の手紙は「来年のクリスマスコンサートは天国で聴かなくてはならないかもしれません・・・みなさんの演奏を聴いているうちに涙が溢れてきました。ありがとうございます」というもの、そしてお二人目は「今回のクリスマスコンサートを聴き、すっかり感動すると同時に生きる勇気が湧いてきました。今まで死にたいと思っていましたが、今日のみなさんの姿を見て目の前がパッと明るくなりました。そしてどうしたわけか涙が流れ出し、止まらなくなりました。今日ほど感激したことはありません。生きる勇気と喜びを与えて下さった皆さん達に心から感謝致します。もう二度と死のうとは思いません。」という手紙でした。どちらも長い文章で、涙無しには読めませんでした。生徒会役員がこの手紙を全校に紹介し、皆、あらためて音楽の素晴らしさを感じ、自分たちにも人のために出来ることあるのだと再認識したものです。立川病院のコンサートはそれ以来毎年続き、今年（2019 年 12 月）で 10 回目になります。

2010 年にはもう一つボランティアの出張コンサートを行いました。国立市にある「介護老人保健施設おおやぎ苑」です。4 年ほど続けて伺いましたが、生徒達が比較的時間が取れる冬や春先は、

インフルエンザやノロウイルス感染の危険性が高く、おおやぎ苑側として外部立ち入り禁止時期に当たってしまい、残念ながら続けることが難しくなっていました。

しかし、音楽科生徒会が主催してボランティアコンサートを行っていることが、地元や国立市の社会福祉協議会などに広まり、その後、商店会からコンサートのオファーをいただくようになりました。2012 年 12 月、国立市富士見通りの「中商店会」から、クリスマスコンサートの依頼です。日頃通学路としてお世話になっている（ご迷惑をおかけしている？）地元商店会のご要望ですから、喜んでお引き受けしました。中商店会主催「第 1 回雪の華コンサート」には、音楽科 3 年のソロ・アンサンブルと、中学合唱部が出演しました。お客様がとても近く、生徒達はまた違った緊張感があったようですが、アットホームな雰囲気の中で心温まるコンサートとなりました。その後も毎年オファーをいただき、様々な生徒が出演しています。こちらは 2019 年 12 月で 8 回目となります。

この「雪の華コンサート」からさらにネットワークが広がりました。第 2 回に出演した電子オルガンの武本和大君の演奏をたまたま聴きにいらしていた JR ラインモールの方から、JR 東小金井駅高架下にオープンする商業施設のオープニングセレモニーで是非彼に演奏してほしいという依頼があったのです。雪の華コンサートでの彼自身のトークで武本君が小金井市在住だと言うことを知り、また彼の演奏に感激し、是非お願いしたいということでした。学校としても有り難いお話、本人もやる気満々で、お引き受けすることにしました。2 月の寒い時期で、しかも駅前の広場（外）での電子オルガン演奏という、武本君にとっては最悪に近いコンディションでしたが、オファーいただいた 2 ステージとも簡易ステージの客席は満席、座れなかった人たちが周りに群がるほどでした。オープニングセレモニーにふさわしいステキなステージとなりました。

この JR のステージは、後に地元国立駅でのコンサートにつながっていきます。2016 年 12 月の

「特急あずさ号運転 50 周年記念キャンペーン」で nonowa 国立と音高のコラボレーションスペシャルライブを行う、という企画です。JR 側からの希望は、「あずさ 2 号」は必ずプログラムに入れて、そのほかにも「いい日旅立ち」や「銀河鉄道 999」など、鉄道に関する曲でお願いしたい、というものでした。



国立駅コン「スペシャル・ライブ」

「特急あずさ」の運行開始が 1966 年 12 月 12 日だったということで、それにちなみ 12 月の日曜日、国立駅南北通路での演奏となりました。当日は 2 回公演がありましたが、師走のせわしい中、また寒空の下、沢山の方々が足を止めて生徒達の熱演に聴き入って下さいました。トランペットのファンファーレから始まり、女声 2 重唱、男声 4 重唱、サクソフォンアンサンブルと、バラエティーに富んだ編成で、特急あずさの 50 周年をお祝いすることができました。国立駅でのコンサートは、2018 年の 9 月にも JR 側からお声がけいただき、秋のイベントの 1 日、音楽科 3 年のソロ・アンサンブルと、中高合唱部が演奏させていただきました。

2018 年には、国立市旭通り商店会から学校宛てに「ジューンフェスタ」出演依頼をいただきました。旭通りで一日フェスティバルを行うので、その一部の時間、メインステージで生徒の演奏を披露してほしい、とのこと。国立市が現在イタリアのルッカ市と姉妹都市協定を結ぼうとしているので、「商店会としてルッカ市ゆかりのプッチーニの曲を入れたプログラムを考えたい。それができるのは音高生！」という事でお声がけいただいたそうです。そのリクエストにお応えして、当日は音楽科 3 年

声楽専攻の 6 名と、伴奏ピアニスト 2 名で、プッチーニを中心としたオペラのアリアをお贈りしました。暑い中、野外ステージでしたが、太陽の光をいっぱい浴びて美しい歌声をご披露しました。旭通り商店会の企画はその後も続き、2018 年 7 月「Piano Pia-no」の開会式にあたる「キックオフコンサート」にて、本校生徒 3 人が演奏させていただきました。8 月にも別のメンバーが「Piano Pia-no」でピアノソロを披露してきました。さらに 2019 年 6 月にも、ふたたび「ジューンフェスタ」出演依頼をいただくことが出来ました。こちらも今後回数を重ねていけるようになることを願っています。



ジューンフェスタ (ステージはトレーラーの荷台)

このように、今あらためて振り返ってみると、最初に生徒会が思い切って動き出した事がきっかけで、いろいろ輪が広がり、学外で生徒達が演奏出来る機会がこれだけ増えたのだ、と気づかされます。生徒の出演に当たっては、準備等、正直大変なことも多いですが、本番を終えた生徒達の成長を毎回感じる事ができ、とても幸せな気分になります。これからも地元を中心に、いろいろな場所で本校生徒が多くの方々の心に響く演奏をご披露出来ることを願ってやみません。

根本 由紀

## 音楽科生徒による出張コンサート

西暦	元号	月日	行事名	備考	主催
2010	平成22	3月5日	第2回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2010	平成22	12月11日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2010	平成22	12月18日	国立あおやぎ苑（介護老人保健施設）出張コンサート		あおやぎ苑主催
2011	平成23	3月5日	第3回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2011	平成23	12月3日	国立あおやぎ苑（介護老人保健施設）出張コンサート		あおやぎ苑主催
2011	平成23	12月10日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2012	平成24	3月11日	第4回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2012	平成24	11月18日	中商店会イルミネーション点灯式	会場は富士見通り「サトウ」次回からは「雪の華コンサート」に名称変更	富士見通り中商店会主催
2012	平成24	12月8日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2012	平成24	12月15日	国立あおやぎ苑（介護老人保健施設）出張コンサート		あおやぎ苑主催
2013	平成25	3月17日	第5回Spring Festival（地域謝恩コンサート）		生徒会主催
2013	平成25	11月17日	第2回雪の華コンサート		富士見通り中商店会主催
2013	平成25	12月14日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2014	平成26	2月2日	nonowa東小金井開業イベント 「ヒガコ街なかフェスティバル」	武本和大ライブ	JRラインモール主催
2014	平成26	3月16日	第6回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2014	平成26	3月22日	国立あおやぎ苑（介護老人保健施設）出張コンサート		あおやぎ苑主催
2014	平成26	3月31日	レストヴィラ国立矢川（介護付き有料老人ホーム） オープニングセレモニー	開業式典で音高生に演奏してもらいたい、という依頼による	レストヴィラ国立矢川主催
2014	平成26	12月7日	第3回雪の華コンサート		富士見通り中商店会主催
2014	平成26	12月13日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2015	平成27	3月15日	第7回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2015	平成27	12月5日	第4回雪の華コンサート		富士見通り中商店会主催
2015	平成27	12月12日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2016	平成28	3月13日	第8回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2016	平成28	12月4日	第5回雪の華コンサート		富士見通り中商店会主催
2016	平成28	12月10日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2016	平成28	12月11日	街かどコンサートin旭通り2016		旭通り商店会主催
2016	平成28	12月11日	あずさ50th Anniversary スペシャルライブ	「特急あずさ号 運転50周年記念キャンペーン」	国立駅と本校の共同企画
2017	平成29	3月18日	第9回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2017	平成29	11月26日	第6回雪の華コンサート		富士見通り中商店会主催
2017	平成29	12月9日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2018	平成30	3月18日	第10回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2018	平成30	6月3日	ジューンフェスタ	国立市と伊ルッカ市の交流促進行事	旭通り商店会主催
2018	平成30	7月21日	「Piano Pia-no」開会式「キックオフコンサート」		旭通り商店会主催
2018	平成30	8月11日	Piano Pia-no コンサート		旭通り商店会主催
2018	平成30	9月24日	nonowa国立スペシャルライブ		国立駅と本校の共同企画
2018	平成30	12月2日	第7回雪の華コンサート2018		富士見通り中商店会主催
2018	平成30	12月22日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催
2019	平成31	3月9日	癒しの「地域演奏」（読売新聞 学活たま）	読売新聞 多摩版に掲載	
2019	平成31	3月17日	第11回地域謝恩コンサート		生徒会主催
2019	令和1	6月2日	ジューンフェスタ	国立市と伊ルッカ市の交流促進行事	旭通り商店会主催
2019	令和1	12月14日	国家公務員共済組合連合会立川病院 出張コンサート		立川病院主催

## 「祝祭」が望むこと

山本 康雄 (元教諭 音楽科 27 回生)

音中・音高の創立 70 周年に心よりお慶び申し上げたい。60 周年記念誌の原稿執筆から 10 年間、学園も多様な方向性を模索し見出して来た。「くにたちアートビエンナーレ」への賛助もその一つである。

その中で、国立市で行われる野外彫刻展「くにたちアートビエンナーレ」テーマ曲作曲の委嘱を受けたのは、2014 年のことである。当時の校長よりテーマ曲を委嘱すべき作曲家を探している旨を打診され、国立市民の私は、日頃の市からの恩恵への感謝・返礼の意を込め快諾した。無名の私であるが、自身の力量を評価されて抜擢されたことは、作曲家として誠に光栄なことであった。この仕事は言うまでもなく私にとってはまさに大舞台の仕事であり、その責任に対する思いは重くなるばかりで、当時私はどこへ出かけるにも五線紙を持って歩き、頭の中では四六時中楽曲構成に追われる日々が続いた。

市のスタッフと打ち合わせをする中、市民祭での演奏、商店会で一定期間楽曲を流す、市のホームページで視聴できるようにする、表彰式で演奏する等色々な案が挙がったが、最終的に表彰式で演奏することに落ち着いた。

楽曲の題名は「祝祭」とし、吹奏楽作品としてまとめ上げた。第一回くにたちアートビエンナーレにおける野外彫刻のテーマが祝祭であることに準じたのである。この曲が表彰式の席上で彫刻製作者の方々を称讃する。それと共に、私が同じクリエイターとして、完成品のお披露目をする。そしてその華やかな舞台の裏にある創作途上の苦悩や葛藤、さらに日々喜んで生きることへの飽くなき希求を曲中に込めることで、これを祝福の場に添え、祝祭という作品の意味だけではなく、私も含め作家が作品を生み出す意味や背景を会場の方々にも共有して戴くことを託したのである。ソナタ的複合三部形式の作品としたこの楽曲は、色々

な素材が曲中で展開という形で止揚され、最後は力強く「愛と生きる喜び」のテーマとして収斂されて全体を貫き、作品としての完結を迎える。

演奏に関してはいくつかの案が出されたが、最終的に音高生の協力を得ることとなった。音高では楽器別定員の設定がないため、標準的な演奏形態を成す編成を組む人員の確保は容易ではないが、より多くの生徒達と本来の感動を共有したいという思いにこだわり、可能な限り大きな編成とした。常日頃、生徒の自主を促す主義から、敢えて「不親切」を標榜している教師山本であるが、そんな私にどれほどの人数の生徒が協力してくれるか正直不安は感じた。ところがそんな教師山本の案に相違して、結果は、個人として自主的な参加を認めた中学生も含め、予想を超える生徒諸君の参加に恵まれ、安堵の思いを嘯み締めた。

ビエンナーレ実行委員から当日の演奏を録音した CD の販売も提案され、国立市内の書店、nonowa 国立、さらにご好意により宮地楽器店頭等での販売が実現した。少数ではあるが、国立市民の方々に購入して戴けたことに感謝している。さらに、国立市と作曲家山本の間で著作権の契約も結び、両者の間では自由に使用できることとした。それを受けて現在 YouTube でも自由に試聴ができるようになっているので、お聴き戴ければ幸いである。

お陰様で第一回本番は好評のうちに終了し、第二回ビエンナーレの表彰式でも演奏させて戴く機会に恵まれた。この大舞台での演奏が、生徒諸君の努力と熱意の結晶として最大のイベントであることには違いないが、今改めて振り返ってみると、我々祝祭合奏団にとっての最大の宝物は、これとは次元を異にする所産である。言うなれば、作曲者、演奏者、聴衆の三者が一体となって同じ土俵で感動を共有できるのが最高の音楽会であり、これこそが私の持論である。ただミスすることなく演奏しただけでは、聴衆の「感心」はもたらされるが、「感動」はもたらせない。もし聴衆に「感動」が沸き起こったとして、果たしてその聴衆に作曲者や演奏者は「その感動も計算済みです。」と言うのだ



ろうか。

このような疑問を抱くようになったことについて、私事であるがとても辛い思い出がある。学生の頃、私は技法と完成度を高めることを自らの信念とし、それに全力を傾けていた。とある自身の作品演奏会終了後、いつものようにロビーで来場者に挨拶をしていた。傍らに面識のない一人の女性が立っていた。気にも留めずにいたが、顔見知りの来場者と挨拶が終わり、ふと見ると、その女性が近づいて来た。彼女は私の手を取り「有難うございました。とても温かい気持ちになれて。」と言いながら泣き出したのである。その時私は何故だか嬉しくなく、むしろこのことによって上述のようなことを信念に掲げてきた自分の人間としてのレベルの低さと愚かさを感じて悲しくなり、その後もその罪の重さを幾度か恥じてきたが、今もこの時の思いを自身への戒めとして心に抱き続けている。私のような者を作らないためにも、生徒諸君と真剣に音楽を考えよう。そのような決意をして以来30年以上の年月が経った。私は音高を退職したが、この課題はまだ果たし終えていないような気がして、また別の高等学校で新たな教員生活を始めた。

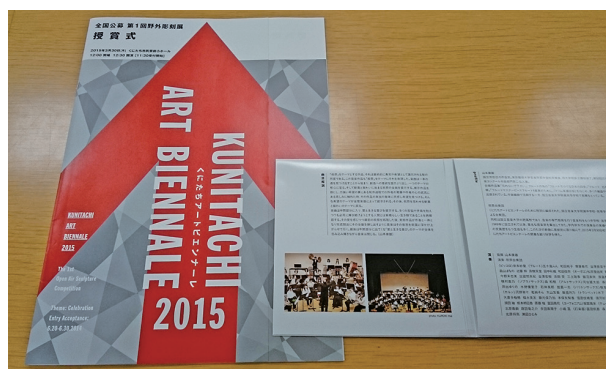
あの日の教訓のお蔭で、この度の生徒諸君との練習も、半分以上は人の温かさを感じることに、生きることの意味を考えることに費やしてきた。最初は輪になって名前覚えゲームを行ったり、練習終了後、パート譜に一人ずつ言葉を書いてあげたりすることから始めた。夏休みの連続終日練習では、校門集合、全員でセッティング、練習終了時には団長の所感発表等の時間を作った。黒板に一人一言ずつ楽曲「祝祭」への思いやイメージを書いてもらい、共通因子で括り、言葉と思いを集約し楽曲に還元することを大切にされた。冬休みも終わり、春休みの練習の頃には「愛と希望と生きる喜び」が皆の心に共有されるようになり、全員が「輝く」という誓いを楽曲に持ち込むようになった。本番が近づいた頃には、その日最後の通奏を行うと、最後の音が消えた後、誰も喋らないだけでなく、微動だにせず、キーンという空気の音と

お互いの目を見つめ合う中に、全員が仲間意識と熱いものを感じ、その空間に自分の居場所を感じていた。

本番当日、自由参加として学校で解散式を行った。20名ほどが集まった。内容は「一人一言ずつ」だけであったが、予想を超えて2時間程かかった。各自が各々の言葉で自分が幸せであることを語った。一番嬉しかったのは、生徒達の感謝の対象が指導に当たった私ではなく、作品「祝祭」との出会いだったこと、そしてそれを共に創り上げてきた本番までの日々に仲間と過ごした時間と空間が、彼らにとってのかけがえのない居場所であったことである。教室を出る仲間達の力強い握手と柔らかな涙に「祝祭」は満足しているであろう。

有り難いことに、今年国立市で開催される「平和首長会議国内加盟都市会議総会」において、作品「祝祭」が「愛と生きる喜び」を参加者に届ける場を戴くこととなった。生徒達の熱い思いを乗せた「祝祭」は、世界平和に向かってさらなる飛翔をしてくれると信じている。

今音高は大きな岐路に立たされていることだろう。道筋は無限にあるが、大切なことは、道筋の表面的な変更や微調整を特徴とするような小手先の策に依ることではなく、打算や保身を捨て抜本的に進むべき道を具体化する覚悟と勇気を貫き、その熟慮によって紡ぎ出された存続、発展への叡智を伝統として尊重することと、その叡智をディテール以外の方法でイノベートし続けることにより、社会と孤立することなく伝統を創り続けることではなからうか。「祝祭」の祈りが届き、さらなる発展に繋がることを願ってやまない。



ビエンナーレのプログラムとCD

## 寒き夜空に願いを贈る

山本 康雄

毎年師走を迎える頃、国立商店会の主催により、大学通りの街路樹はイルミネーションに彩られる。前校長を通じて委嘱を受けた自身の作品で、音高の生徒諸君や市民の皆様と年末に花を添えられることに感謝したい。学校行事との日程調整や教育方針による制約などがあることを受けて、編成や演出はその都度異なり全体として多様なものとなった。中学生と個人的に参加してくれた普通科の生徒によるカルテットやサクスのみによる演奏もあった。近々の編成では、私が本校教員の座を退いたにもかかわらず、生徒諸君の作品への期待と熱意はもとより、若い理論ソルフェージュの教員による指導等の後押しもあり、木管楽器や打

楽器も加えた編成で、作品を夜空へ向けてさらに華やかに放射することができた。国立市で歴史を積み上げる音高生と共に、市の発展を願いイルミネーションを讃える祭典を手伝えることは、国立市民として、また音高にゆかりのある一人の仲間として嬉しい限りである。



クリスマスイルミネーション点灯式と「くににゃん」

## 初の共催による演奏会

山本 康雄

ビエンナーレ表彰式で「祝祭」の初演が終わった頃、あるスタッフから一つの提案が出された。彼女は私が担当した総合の授業内容について以前雑談したことを覚えており、ビエンナーレ期間が終わる頃に会場を提供するので、音高生の企画・運営と出演による演奏会を行ってはどうか、との話を戴いた。吉野前副校長も快諾されてご協力下さり、出演だけではなく、舞台監督からレセプション

ニストまで音高生が運営する「クラシックコンサート」の実現に至った。実現に先立ち、夏休み中、ホールスタッフの方々から忙しい時間を割いて生徒達に丁寧な指導を惜しみなく戴くことができ、音高生にとってかけがえのない貴重で素晴らしい経験となった。当日は開場時刻を早めるほど大勢の市民の方々が来場して下さり、音高生は大きな満足感と自信を戴いた。ただ（公財）国立文化・スポーツ振興財団と音高との初の共催にも拘らず、学内において継続を求める声は出ず1回限りとなってしまったことが惜まれる。

# 國際交流

## 台南市立大成國中音楽班 (台湾の中学生オーケストラ) との 交流会について

この交流会は、本校卒業生で台南市立大成國民中学音楽班の指揮者を勤める徳岡直樹先生よりお声がけをいただき、2015年6月、2019年6月の2回、実現した企画である。

台湾はアジア諸国内において、クラシック音楽のマーケットが社会的に高い評価を得ており、演奏や鑑賞に熱心な地域性を持っている。また、日本と台湾は物理的な距離だけでなく、西洋音楽を学んできた過程および双方の考え方が似ており、何より音高卒業生が指導しているという点で、交流するのにふさわしい存在であることは間違いない。

台湾の中学生たちは演奏表現が自由でパワフルなので、彼らと演奏することで、音中生はとても良い刺激を受け、より豊かな感情が引き出され、人に感動を与えられる音楽が生まれたようだ。台湾オケにリードされながらも、演奏しながら相互理解が進んだようで、次第にハーモニーが溶け合い素晴らしい音楽が醸し出された。

客席の音中生が目を輝かせて聴いていたのも、非常に印象に深かった。

同じ学齢ということもあり、すぐに打ち解けた中学生たちは、昼食をとりながら英語や漢字の筆談などを交えて交流が進み、連絡先の交換なども行っていた。

今後は機会があればこちらから台湾に出向くなど、永続的な交流が行われていくことを望んでいる。

五十嵐 稔



## 台湾の中高生オーケストラと母校

徳岡 直樹 (音楽科 41 回生)

パリ留学を終えて、日本を飛び越し台湾に拠点を定めたのが2001年。以後、企業の支援を得て夢のような新生オーケストラを育て上げ、台湾のプロオーケストラを指揮する機会にも恵まれた。驚いたことに台湾は弦楽器の水準が高く、日本の一般校に吹奏楽クラブがあるように、弦楽アンサンブル、弦楽オーケストラが親しまれている。そして音楽学校こそないものの、公立のいくつかの小・中・高校には音楽クラスが存在し、ピアノ主科の生徒も副科として管・弦・打楽器を学ばなければならないため、それぞれの学校でオーケストラ授業がある。これが実はかなりの水準を持っている。優秀な学校は相当に高度な演奏水準で、本格的な交響曲レパートリーまで取り上げることが可能である。

自分がいま住んでいるのは台南市。台湾南部の

高雄市で、特にレベルの高い学校のオーケストラを育て上げるという重責も与えられ、現在6校のオーケストラ、弦楽オーケストラを指揮させてもらっている。年間のコンサート計画を立て、コンクールの準備をし、協奏曲演奏や外来の音楽家によるマスタークラスや共演の機会を準備する。基本的なクラシック・レパートリーから、恩師フランシヌ・オーバンの交響曲の台湾初演、ウォルトンやラフマニノフ、カリニコフとプログラムが多彩になってゆく中で、台湾の子供達は「これならば日本に連れて行っても恥ずかしくないレベルだ」と思えるように育っていった。

自分がこれまでの人生の中で、乾ききった砂が水を吸い込むようにいちばん勉強できたのは、まちがいなく音高での三年間だった。少なくともその後の勉強の基盤を築くことができたのは音高で学んだものだった。そうすると、どうしても母校に「自分の仕上げた成果」を持っていきたい。それに自分の育てた生徒たちの演奏が、いま音高に学ぶ後輩の刺激になれば嬉しいとも思った。そこ

で、単なる交流会、訪問演奏ではなく、台湾のフル編成のオーケストラが音高の優秀な生徒をソリストに迎えて共演する、協奏曲をプログラムに組みたいと考えた。そこで2015年初頭、副校長でおられた星野先生に連絡、初めての、しかも卒業以来ほとんど繋がりのなかった自分の、加えて聞いたこともない台湾の中高校生との計画ということで相当不安を持たれたと思うのだが、音大講堂での交流コンサートの場を設定してくださった。

しかしそうなるに練習の機会が限られる。日本行きの直前に台湾・台南でのコンサートが決まっていたため、どうせなら音高のソリストに台湾に来てもらって一度共演し、それから日本で演奏したらどうか？と、悪ノリ的に発展した。

かくしてこのようなプランが確定した。

2015年5月24日（日）午後2：30

台南市立文化センター

台南市立大成国民中学音楽クラス発表会

6月1日（月）午後2：00 国立音楽大学講堂

台南大成國中・国立音楽大学附属高校交流音楽会

（曲目）

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第一番ハ長調  
Op.15

ピアノ：森 遥香（第一楽章）

齊藤梨乃（第二、三楽章）



台南市文化センター演奏会

音高で推薦された二人のソリスト、森さんが高校三年、齊藤さんが二年生になったところだった

ろうか。二人にとっては降って湧いたような話だったろうが、それぞれお母さんとともに台湾にやってきてくれた。コンサートの二日前、学校でのリハーサルで「日本からピアノの生徒が来る！」とワクワクしている台湾の中学生は、二人のソリストとともに、最初おずおずと、次第に新鮮なベートーヴェンを奏で始めた。森さんも齊藤さんも協奏曲は初めてだったのだろうか？自分も短いリハーサルで、最大限二人のソリストを補助、オーケストラとソリストの両方に「聴き合うこと」とバランスの取り方を伝えた。二人ともたいへんよく勉強していて、高校生ながらこちらから発したアイデアをすぐに理解し、堂々とした間合いを持った演奏ができるようになった。

翌日は土曜日だったが、二人のソリストが「練習したい」というので、誰もいない大成中学のレッスン室で午前中たっぷり練習。引率の星野先生もお疲れ様だったと思う。短い台南滞在なので、二人にも（そしてお母様方と星野先生にも）最大限こちらの名物を楽しんでもらおうと、観光ガイドには必ず載っている台湾風ラーメンの度小月、昼食はイタリアンだったが夜には台南でいちばん高級な飲茶、コンサートの後には大成中学が結構いいレストランで校長、父兄会を交えての夕食会を準備してくれた。自費で来てくれた二人に何とか好印象を持って帰ってもらいたいと奮戦したつもりである。

「観光よりも練習！」という絵に描いたようなマジメな良い子である二人、観光としてはわずかに赤崁樓（ツーカーンロウ）を見に行っただけだった。あいにく五月末で台湾はすでに梅雨。朝は晴天でも昼から急に空がくもって、あげく大雨…というのが常で、赤崁樓でも凄まじい雨が降り始めた。亜熱帯の台湾の大雨は日本の大雨とは迫力が違う。赤崁樓で身動きが取れなくなり、タクシーで我が家へ来てもらったが「この雨だと日本では待機になります」というのを、こちらが「え、そうなの？」と、教えられたこともあった。

齊藤さんの先生である米持先生は、リハーサルのためだけに台湾に来てくださり、翌日は日本というハードスケジュール。星野先生も二人につきっきりで、台南文化センターのコンサートでは「客席で聴こうかな」というのを、二人が「舞台袖にいてください!」とお願い。自分が「過保護だねえ〜」と笑ったものの、異国台湾で初めての協奏曲演奏、それは緊張しただろうな…と今さらながら思う。

生き生きとしたタッチで、月並みな言い方ながら初々しい青春フィーリングをのびのびと弾き出した二人には、本当に温かい拍手が寄せられた。そして一週間後には今度は我々が東京に向かい、「久しぶりです」という挨拶の後、再びベートーヴェンを演奏した。こうして台湾の生徒には充実した母校を見せることができ、音高の皆さんには自分が育てた成果を聴いてもらうことができた。講堂で、目の前にあのパイプオルガンを見上げつつ指揮台に立った時には、さすがに感激した。今は亡

き小山章三先生（国立音楽大学名誉教授、1930～2017）が大変喜んでくださったのが懐かしい。

コンサートの後、大学の5号館地下食堂で交歓の場も持たれた。台湾側のバスを見送ってくれる音高生、バスが走り出すのを何か叫びながら疾走して付いてくる男子生徒を眺めながら「ああ、青春してる」と微笑ましくなった。あれから四年が経ったが、台湾の生徒にはあの折の楽しかった「くにたち」の記憶が鮮明に残っているようである。



交流演奏会（2号館スタジオ）



## 中学生・高校生の海外短期留学について

2015年、グローバル社会で活躍する人材の育成を目標に、生徒の海外研修に向け「国際交流・留学委員会」が発足した。

その目的は、コミュニケーション力、語学力、発信力など総合的な人間力を兼ね備えた人材育成である。留学により日本国内では得がたい経験を積み、これからの社会に必要な多様性を受け入れる度量を持ち、本校のみならず社会をリードする人材になるよう望んでいる。

### 1. 英語留学

第1回 2018年3月18日～29日の12日間、オーストラリア・クイーンズランド州の1895年

創立の名門女子校、音楽芸術・演劇の教育にも定評がある私立セント・マーガレット女子校（St. Margaret's Anglican Girls School）へ中学生4名が短期留学した。現地校では授業やプログラムに参加し、英語のレッスンを受けた。また、現地滞在中はホームステイをし、ホストファミリーとの生活でも多文化理解を深めた。学校のほかに博物館やブリスベン市内観光なども体験している。



短期留学に出発

第2回 2018年8月17日～30日の14日間、ニュージーランド：タウランガ（オークランドか

ら車で3時間)、現地受け入れ校は音楽・芸術・スポーツの設備が充実したオツモエタイ・カレッジ (Otumoetai College) に短期留学した。この学校では、芸術やスポーツを通して個人の才能を伸ばす教育を行っている。キャンパスツアー、ESOL英語研修、現地校生徒のバディと組んで授業やアクティビティを行った。

現地滞在はホームステイで、高校生7名が参加した。

帰国した生徒からは以下のような声が聞かれた。

- ・飛び入り参加したイベントで演奏出来たこと、とても褒めてもらったことが嬉しかった。
- ・自分が話したいことが思うように伝わらず悔しかった、次の機会までに英語を頑張ろうと思った。
- ・将来は海外に住みたい。
- ・ホームステイ先のホストファミリーが、週末に色々な場所へ連れて行ってきて楽しかった。
- ・リスニングの力が向上した。
- ・様々な環境に順応できる対応力が身についた。
- ・留学したことで外から日本のことを考える機会になった。
- ・バディのみんなが優しく楽しかった。

今後の展望としては、2021年度からの運用を目指しオーストラリア・クイーンズランド州のセントエイダンス校 (St. Aidan's Anglican Girls School) と提携を進め、3ヶ月以上のターム留学制度を確立したいと考えている。

柔軟な視点と心を持つ年頃にこのような貴重な体験をすることは、多様性を受け入れ幅広い考え方を身に付ける大きなチャンスである。今後、どんどんチャレンジして欲しい。

## 2. 音楽留学

音楽留学については、本校と提携関係にあるオーストリアの「アーダルベルト・シュティフター・ギムナジウム」(リンツ音楽高校) (Adalbert Stifter Gymnasium) へ2015年より毎年高校音

楽科の生徒1名が9月～12月までの3ヶ月間短期留学を行っている。

慣れないドイツ語に四苦八苦しながらも、充実した音楽漬けの毎日を送っているようだ。

西洋音楽発祥の地において、現地の空気を肌で感じるだけでも自身の音楽観に良い変化が生まれることは確かだ。現に帰国した生徒たちは、音楽表現の幅や度量が広がっている。

また2年毎にリンツ高校生徒を迎え、本校での研修(交流)を一週間程度行っている。

リンツ生と本校オーケストラとの共演や校内リサイタルを催し、音楽的表現の多様性などを体験している。

## 終わりに

海外から日本を見ることで、自分たちの将来像を考えるきっかけとなる。グローバルな時代において留学を早い段階で体験することは有益なのではないかと考えられる。この制度を大いに利用し、世界への足掛かりにしてもらいたい。

五十嵐 稔

## オーストラリアでの充実した 10 日間

中学 3 年 高野 花菜子

私は中学一年生の春、オーストラリア短期留学に参加しました。私が留学体験に参加しようと思った理由は、大きく分けて二つあります。一つ目は、私は、もともと英語に対して苦手意識を持っていて、それを克服したい英語を好きになりたいと思ったからです。当時の私は、その苦手意識が災いしてか、努力しているつもりでしたが、テストの点数もあまりいい点とは言えませんでした。なので、少しでも英語の苦手を克服したい、英語を楽しめるようになりたいと思い、留学体験に参加することを決めました。二つ目の理由は、日本だけではなく、他の国の生活や文化を知りたいと思ったからです。私は、社会の授業で外国の文化について学ぶのが大好きだったので、それを自分の目と耳で実際に経験したいと思ったのが二つ目の理由です。しかし、実際に留学が決まったときは、現地での生活、主にホストファミリーの人と仲良くやっていけるか、自分の話す英語がきちんと伝わるのかどうかなど、多くの不安が胸をよぎりました。

オーストラリアに着いて最初に向かったのは、現地のセント・マーガレット・アングリカン女子校というキリスト教系の学校でした。校舎は、ブリスベン中心部から 10 分ほどのシティーとブリスベン・リバーの美しい景色が見渡せる高い丘にあり、学校生活では自分と同じくらいの現地の学生がバディーとして一緒に行動してくれました。バディーの子は、緊張していた私を気にかけ、たくさん話しかけてくれました。しかし、まだ私はネイティブが話す英語に慣れていなかったのも、しっかり聞き取ることができず、何度も聞き返したりだまりこんで話せなくなってしまうたりしました。そんな私をバディーの子は辛抱強くサポートし、めげずに毎日話しかけ、一緒にお昼を食べたりと行動を共にしてくれました。また、学校では、バディーの子と一緒にクラス授業も受けました。フランス語に美術、理科に数学、他にもたくさんの

授業を受けましたが、その中でも特に印象に残っているのはフランス語と美術の授業です。フランス語の授業は英語でフランス語の授業を展開するので、理解するのに二重の難しさがありました。しかし、バディーの子が隣でもう一度丁寧に説明してくれたり、グループワークの時は、同じグループの子がサポートしてくれたので落ち着いて授業を受けることができました。また、美術の授業では、バディーの子の自画像の制作を手伝いました。バディーの子はとても絵が上手だったので邪魔を邪魔してしまわないか不安でしたが、授業を終えた後、バディーの子が笑顔で言ってくれた“Thank you for helping me!”という言葉に、とても温かな気持ちになったのを覚えています。

この留学の期間中は、ホストファミリーとも、とても充実した時間を過ごすことができました。始めは英語でしゃべるのにまだ慣れておらず、家の中のルールを説明してもらったり、また自分のことについて質問をされても即座には内容を把握できず、自室に戻り、辞書で調べ発音の練習をして、伝わるかどうか不安のなか一生懸命話しました。しかし、日を追うごとにその不安は薄れていきました。耳が慣れ、徐々に聞き取りもスムーズになり、自分のその時点で習得していた知識と辞書を駆使し、徐々に答えられることが増えていきコミュニケーションをとるのが楽しくなりました。

ホストファミリーは、私を本当の家族のように迎え入れ、温かな愛情を注いでくれたので、日本に帰るころには、私の中にも、ホストファミリーに対する離れがたい感情が生まれていました。

この留学を終えて、私は今までよりもっと積極的に英語を勉強しようという思いが強くなりました。すると、少しずつですが、学校の英語の授業でも苦手意識が消えていき、授業を楽しめるようになりました。これも全て、留学という貴重な経験のなかで出会ったバディーの子やホストファミリー、そして私の留学の希望を叶えてくれた両親のおかげです。この留学は 13 歳の私にすばらしい時間と広い世界を知る楽しさを経験させてくれたかけがえのないものとなりました。



## リンツ音楽高校 交換留学 体験記

音楽科3年 嶋津 玲

### はじめに

国立音楽大学附属高等学校の交換留学制度への参加が叶い、僕は2018年9月より約3ヶ月間、オーストリアのリンツにある Adalbert Stifter Gymnasium（以下リンツ音高）に留学した。クラシック音楽の本場であるヨーロッパに、音楽留学することへの憧れは以前から持っていたが、高校時代に実現するとは想像もしていなかった。貴重な機会をいただいたことに感謝している。

### リンツでの生活

初めての海外生活、しかも3ヶ月間の一人暮らし。その経験から得られたことは数えきれない。

当初リンツの隣、プッヘナウ市で、3LDK 庭付きのゆったりした戸建て住宅を借りて暮らし始めた。だが、先方の都合で9月中には他の住まいを探す必要に迫られた。幸いリンツ音高から歩いて15分くらい、トラム（路面電車）を使うと10分以内という好立地に、45㎡くらいのワンルームを借りることができた。1週間だけ生活したプッヘナウからリンツまでの引っ越しは、タクシーを利用した。予約したタクシーが本当に来るのか、たくさんの荷物を載せることができるのか、不安でいっぱいだったが、親切な運転手さんと、とても優しい家主さんのおかげで、想像以上にスムーズに引っ越しができた。

リンツの部屋も、本当に居心地がよく、快適な生活を送ることができた。食事は自炊で、ほぼ毎日のようにスーパーマーケットに足を運び、様々な肉、野菜や果物を手にした。時には対面販売のお店で、店員と会話をしながら商品を選ぶこともあった。印象に残っているのは、美味しいパン、チーズ、ハム、ソーセージ、肉、じゃがいも、リンゴ、フレッシュジュースだ。帰国してから、同じ味の物はな

いかと探したが、残念なことに、やはり現地で食べた記憶とは程遠く感じる。

生活を営む上で大切だったのが「ゴミ出し」だ。オーストリアはドイツと並んで、とてもゴミの分別について規則が厳しく、自分で一つひとつゴミを分別しておき、指定された収集所に持って行かなければならなかった。確かに大変だったが、帰国した今でも、ごく自然にゴミの分別ができるようになったし、環境問題についても考えるようになった。

オーストリアでは、夜になると次々とお店は閉店していき、22時頃にはもう街中がとても静かになる。日曜や祝日は、ほぼ全てのお店がお休みとなり、街には教会の鐘の音だけが響き渡っていた。リンツ音高のすぐ近くにあるリンツ新大聖堂に、日曜ミサのため何度か足を運んだ。オーストリア国内で2番目に大きいという荘厳な大聖堂だ。街には歩く人もまばらだが、中に一歩足を踏み入ると、沢山の人がミサに参加していて驚いた。時間の流れ方が日本とは掛け離れている。とても穏やかな週末だ。

### 学校・クラスメイト

リンツ音高の始業時間は、国音よりもおよそ1時間早い。音楽以外にも、様々な教科授業が用意されている。昼過ぎにはほぼ全ての授業が終わり、その後はレッスンやオーケストラを受講する日もあった。ヴァイオリンの個人レッスンは通常週1回、リンツ市内にある私立アントンブルックナー音楽大学で行われた。特にオーストリア出身であるモーツァルトの作品に関する指導は、とてもきめ細やかで素晴らしい時間だった。毎日の練習が、とても密度が濃く集中できるのだ。それは、レッスンや学校、クラスメイトたちからの刺激のせいもあるが、街の気配や、部屋の響き方にも大いに影響されたように思う。五感を使ってクラシック音楽の本場の香りを実感することができた。

リンツ市内にある語学学校で、ドイツ語の習得にも励んだ。英語が話せれば、生活全般や友人た

ちとのコミュニケーション、レッスンでは大きくは困らないが、街や商品などの表記がドイツ語だけのことも多く（英語表記すらない）、単語は知っておかないと困ってしまうシーンが多いと感じた。英語はもちろんだが、留学前に少しでもドイツ語を習得できたなら、もっと積極的に留学生活を楽しむことができたに違いない。

言葉やルールが違う環境で僕が困った時は、気にかけてくれるクラスメイトが支えてくれた。例えば、リンツ音高の時間表は Web 上で確認するのだが、表記されている省略記号の意味や、集合場所などが分からないことがあった。でも、僕が助けを求める前にクラスメイトが連絡をくれて、学校外の集合場所まで一緒に連れて行ってくれた。また、授業中の先生の板書がドイツ語（筆記体）で、僕が理解しにくい時も、クラスメイトが英語で説明してくれたり、ブロック体で書いたノートを見せてくれたりした。いつも自然にサポートしてくれる優しさが、本当に有り難かった。



リンツ音高クラスコンサート

思想・趣味・マナーなど何もかもが日本の高校生とは違う生徒たちと関わるうちに、「今までなんと小さな概念の中に生きていたんだろう」と感じるようになっていった。特に印象的だったことは、彼らと音楽との距離感だ。教室にあるピアノを、休み時間ともなれば誰かが必ず弾いていて、一緒に歌ったり、連弾したり、演奏について語り合ったり、絶えず音楽との時間が流れていた。皆、主専攻だけでなく様々な楽器の演奏ができて、音楽全般に対して非常に積極的だった。帰国した今も、

僕らはずっと連絡を取り合っている。日本とオーストリアの距離を感じることなく、会話をリアルタイムで楽しんでいる。

## 留学生活を振り返って

リンツでは、想像していた以上に自分の時間を持てたと思う。

電車で1時間半の首都ウィーンには、夏期マスターコースでお世話になった先生にレッスンをさせていただけることとなり、何度か通った。そしてその足で楽譜屋さんやヴァイオリン工房にも寄ることができた。またリンツ音高の秋休みには、ひとりでザルツブルグにも出かけ、1日かけて歩き回った。モーツァルトハウスなど、音楽に関する色々な場所に実際に足を運ぶことができて、たくさんの思い出を作ることができた。

音楽に対しても、異文化に対しても、既成概念を取り払い、大きな視野で見たり感じたり聴いたりすることが大切だと思うようになった。出会った多くの人たちや、多くの経験が、自分自身を成長させてくれたように思う。高校時代の留学が、人生観をも変える貴重な体験になったことは間違いない。



リンツ音高前にて

# 拾遺

## 東日本大震災その時

2011年3月11日、この国立市でも大きな揺れを感じた。今まで私自身も経験したことのないほどの大きく長い揺れ方だった。午後2時46分。この時、中学生の全学年は卒業演奏会に参加しており、会場である立川市の国立音楽大学小ホールにいた。この国立にある附属中高の校舎には、国立音大の先生による特別授業に参加する高校音楽科2年生やオーケストラの生徒が在籍していた。高校普通科の1・2年生は「春のプレ講座」という新学年に向けた特別授業期間で多くの生徒が選択科目の授業を受けており、3年生も各自の用事で少数が学校にいた。

その時、普通科の職員室（当時は1号館4階）で授業の準備をしていた私は、廊下に出ると、各教室を急ぎ足に回った。先生方の指示で机の下に入っている生徒もいた。私も尋常ではない状況だと感じて、4階にいた生徒全員に屋外に避難するよう呼びかけた。他の先生方も同意し、校庭に避難した。差し迫った緊張感でもなかったが、生徒たちも「いつもとは違う」と感じながら、ふざけることなく階段を下り、ほどなく他のフロアの音楽科の生徒たちも校庭に集まった。

しかし、同時刻の東北の惨状は我々の想像を絶しており、生徒を避難させた後、少したって職員室のテレビで見た映像、すなわち津波が仙台平野を呑み込んでいく様子は目を疑うものだった。強い揺れのため教員たちの机の書籍の多くが職員室の床に散乱して、後片付けに手間がかかったが（幸い校内で、壁・床・ガラスなど破損した物は1つもなかった）、被災地で今起こっていることを想像すると、深刻な気持ちにならざるを得なかった。

音大で卒業演奏会終盤の演奏中に地震に見舞われた中学生たちは、演奏を中断し、安全を確保しながら大ホールにて暫く待機することになった。国立では、3月のまだ寒い校庭からいったん教室に戻った高校生たちだが、再び強い揺れがあったためもう一度校庭に避難し、その後、午後5時頃、最も新しい校舎である3号館の1階生徒ホールや図書館に集まることにした。3号館は生徒ホール

の吊りランプが大きく揺れたが、図書館の書籍や機器の落下も無く、最も安全に思われた。音大に中学生とともにいる教員と音高にいる教員で連絡を取り、生徒らが安全に帰宅できることを第一に考え、原則として保護者に迎えに来てもらい、順次下校するということにした。首都圏の鉄道は地下鉄の一部などを除き、ほとんどの路線が停止しており、通常の下校手段はとれなかったからである。



震災の夜、図書館で過ごす生徒たち

結局、音大では音大教職員と音中の引率教員が協力して中学生の保護にあたり、この日のうちに保護者が迎えに来られない生徒たちは宿泊することになった。音高でも帰る手段のない80名ほどの生徒たちが10名ほどの教職員とともに、図書館と生徒ホールに宿泊することになった。この時、役立ったのは本校が以前から災害を想定して備蓄していた食料である。栄養補助食品については「口に合わない」と贅沢を言う声もあったが、一方でお湯をかけて作る「おこわ」は温かくありがたかった。家が近い私は学校に宿泊することはなかったが、自転車で家まで帰り、有り合わせのリングを持ち出し、通り道の生協で買い足して学校に戻った。生徒ホールにいる高校生たちに剥いたリングを一切れずつ配って、お礼を言われたことを思い出す。生徒たちは異常事態を感じてはいるものの、このどこか特別な状況を「滅多に経験できない体験」として少しどきどきした気持ちも合わせて味

わっていたようである。膝を抱えて車座になって話している高校生の様子はキャンプや合宿のようにも見えた。

その後、職員会議での議論の末、3月15日に予定されていた卒業式は中止となり、卒業にあたっての書類は祝辞や卒業生代表の答辞を印刷したものも含め後に郵送・手渡しなどで卒業生に配布された。月末の吹奏楽部や合唱部の演奏会も延期となり、行事予定に大きな変更があったことも震災の影響の大きさを示すものである。

高校生のうちこの特殊な環境の中で体調を崩し病院に搬送された生徒が2人いたが、中学生・高校生を含めて本校生徒に怪我人が無かったことは本当に幸いであった。しかし一方で、東日本全体の被災者の方々、とりわけ東北地方の方々の甚大な被害は忘れられてはならず、亡くなった方々の御冥福を祈るとともに、8年以上たった今でも多くの方が「震災の中」にあることを我々は常に心に留めておくべきであろう。

秋場 健志



## 2020 東京オリンピック・パラリンピック参加国 国歌調査演奏プロジェクト

### 1. 目的

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、出場国の国歌を本校生徒が楽器演奏（合唱）し、出場選手および関係者へのエールを送り、歓迎の意を表すると共に世界の人々について理解を深めることを目的としている。

内容は、世界の国々や地域の国歌調査を行い、参加国や地域の人々の歴史、民族的な意味を受け止め、国歌または国歌的なもの（愛唱歌）とされる音楽の成り立ちを調べ、編曲し、演奏する、というものである。本校生徒の得意とする分野の力を発揮できる独自のプロジェクトである。

### 2. 実施

約200カ国を22グループに分け、それぞれが担当した国・地域について下記のように活動している。

1. 大使館とメールや電話などで連絡を取る
2. 本プロジェクトの趣旨を説明する
3. 楽譜の提供および編曲・演奏の許可を得る
4. 編曲・演奏し、録音・録画する
5. 各国選手団へプレゼントする

大使館との連絡文書を英語で作成するところか

ら始まり、グループでまとめ、演奏するためには、主体的に考え行動する力、協調性が必要である。この作業グループは中学高校の別なく、学年を越えて協働することで生徒同士の交流が生まれ、本校全体の活性化にもつながると期待される。

実際には、意図を英語で説明するのに苦労したり、大使館側から返事がなかなかこないケースもあり、作業グループの進行状況はまちまちである。

### 3. 展望

最終的には、自分たちが作成したものを関係各所に発信する力、プレゼン力が問われる。今後は、完成した録音物をどう発信するかを考え、プロジェクトの完了形を視野に入れた取り組みが必要である。2020年の完成予定を目前に、正念場をむかえている。

五十嵐 稔



モンテネグロ領事館にて

# 資料編

## データで見る学校

現所在地 〒186-0005  
東京都国立市西2-12-19

校地面積		18,054㎡	
校舎面積	1号館	4,761㎡	鉄筋コンクリート4階建
	2号館	6,505㎡	鉄筋コンクリート地上3階、地下1階
	3号館	2,954㎡	鉄筋コンクリート3階建て
	体育館	757㎡	

教室数	普通教室	23		
	特別教室数	音楽室	7	
		家庭科室	2	
		視聴覚室	1	
		情報教室	2	DTM 1
		スタジオ	3	
		技術・美術室	1	
		保健室	1	
		理科室	3	
		レッスン室	28	

教職員数	教諭	40	校長、副校長を含む
	講師	79	
	職員	36	

ピアノ台数	グランド	67	
	アップライト	22	
パイプオルガン		1	Aスタジオに設置

生徒用PC台数	情報教室	40	教員用コンソール 1
	DTM	11	教員用コンソール 1
	図書館・閲覧コーナー	6	
	図書館・視聴室	10	タブレットPC

図書館資料数	書籍	37,277	
	楽譜	6,537	
	雑誌	3,709	
	CD	5,945	LPを一部CD化
	DVD	1,011	ビデオテープ、LDはDVD化

2019年4月1日現在

## 中学校 生徒数

西暦	平成	学年	組	コース別	プログラム別	男子	女子	計	総計	全学年計
2010	22	1	A			3	25	28	28	
			B			2	27	29	29	
			C			0	29	29	29	
		2	A			5	36	41	41	
			B			4	36	40	40	
		3	A			2	28	30	30	
			B			0	30	30	30	227
2011	23	1	A	普通		0	5	5		
				音楽		5	26	31	36	
			B	普通		3	2	5		
				音楽		2	29	31	36	
		2	A	普通		2	5	7		
				音楽		4	18	22	29	
			B			0	28	28	28	
			C			0	29	29	29	
		3	A			5	34	39	39	
			B			4	36	40	40	237
2012	24	1	A	普通		2	8	10		
				音楽		2	19	21	31	
			B	普通		1	5	6		
				音楽		2	24	26	32	
		2	A	普通		3	3	6		
				音楽		2	28	30	36	
			B	普通		0	7	7		
				音楽		5	24	29	36	
		3	A	普通		2	4	6		
				音楽		4	19	23	29	
			B	普通		0	6	6		
				音楽		0	22	22	28	
			C	音楽		0	28	28		220
2013	25	1	A	普通		2	4	6		
				音楽		3	24	27	33	
			B	普通		0	5	5		
				音楽		0	29	29	34	
		2	A	普通		1	8	9		
				音楽		2	21	23	32	
			B	普通		2	7	9		
				音楽		2	21	23	32	
		3	A	普通		2	6	8		
				音楽		3	25	28	36	
			B	普通		3	8	11		
				音楽		2	23	25	36	203
2014	26	1	A	普通		0	6	6		
				音楽		4	23	27	33	
			B	普通		0	5	5		
				音楽		4	23	27	32	
		2	A	普通		1	4	5		
				音楽		3	25	28	33	



西暦	平成	学年	組	コース別	プログラム別	男子	女子	計	総計	全学年計		
2014	26	2	B	普通		0	3	3				
				音楽		0	30	30	33			
		3	A	普通		3	8	11				
				音楽		3	17	20	31			
			B	普通		0	7	7				
				音楽		0	24	24	31	193		
2015	27	1	A	普通		2	5	7				
				音楽 (声楽)		1	4	5				
				音楽		1	25	26	38			
			B	普通		1	6	7				
				音楽 (声楽)		0	5	5				
				音楽		2	24	26	38			
		2	A	普通		0	5	5				
				音楽 (声楽)		0	1	1				
				音楽		4	22	26	32			
			B	普通		0	6	6				
				音楽 (声楽)		0	0	0				
				音楽		4	21	25	31			
			3	A	普通		1	3	4			
					音楽 (声楽)		0	0	0			
					音楽		3	25	28	32		
		B		普通		0	5	5				
				音楽 (声楽)		0	3	3				
				音楽		0	25	25	33	204		
		2016	28	1	A	普通		1	6	7		
						音楽 (声楽)		0	2	2		
						音楽		5	21	26	35	
B	普通					2	4	6				
	音楽 (声楽)					0	7	7				
	音楽					3	19	22	35			
2	A			普通		1	4	5				
				音楽 (声楽)		1	4	5				
				音楽		2	25	27	37			
	B			普通		2	6	8				
				音楽 (声楽)		0	5	5				
				音楽		1	23	24	37			
	3			A	普通		0	7	7			
					音楽 (声楽)		0	2	2			
					音楽		4	20	24	33		
B				普通		0	7	7				
				音楽 (声楽)		0	2	2				
				音楽		3	20	23	32	209		
2017	29			1	A	普通		1	5	6		
						音楽 (声楽)		1	4	5		
						音楽		2	21	23	34	
		B	普通		0	8	8					
			音楽 (声楽)		0	2	2					
			音楽		5	19	24	34				
		2	A	普通		1	7	8				
				音楽 (声楽)		0	3	3				
				音楽		5	19	24	35			

西暦	平成	学年	組	コース別	プログラム別	男子	女子	計	総計	全学年計				
2017	29	2	B	普通		2	4	6	34	211				
				音楽 (声楽)		0	6	6						
				音楽		3	19	22						
			3	A	普通		0	5			5			
					音楽 (声楽)		0	8			8			
					音楽		3	21			24			
				B	普通		1	5			6			
					音楽 (声楽)		1	2			3			
					音楽		2	26			28			
2018	30	1	A	普通		3	6	9	36	207				
				音楽 (声楽)		1	6	7						
				音楽		3	17	20						
				B	普通		4	4			8			
					音楽 (声楽)		0	5			5			
					音楽		2	21			23			
		2	A	普通		1	7	8						
				音楽 (声楽)		1	3	4						
				音楽		2	19	21						
				B	普通		0	4			4			
					音楽 (声楽)		0	4			4			
					音楽		4	22			26			
		3	A	普通		2	7	9						
				音楽 (声楽)		0	6	6						
				音楽		3	16	19						
				B	普通		1	5			6			
					音楽 (声楽)		0	4			4			
					音楽		5	19			24			
			2019	31	1	A	音楽	実技特選			0	5	5	29
								実技			0	14	14	
								準備			0	3	3	
文理	特選	0					2	2						
	総合	0					5	5						
	音楽						0	3	3					
	B	音楽				実技特選	0	3	3					
						実技	2	17	19					
						準備	0	3	3					
		文理				特選	1	0	1					
						総合	0	2	2					
						音楽		0	2	2				
2	A	普通				4	4	8						
		音楽 (声楽)				0	5	5						
		音楽				2	18	20						
		B			普通		3	4	7					
					音楽 (声楽)		1	5	6					
					音楽		3	18	21					
	3	A			普通		2	8	10					
					音楽 (声楽)		1	3	4					
					音楽		2	19	21					
		B	普通		4	7	11							
			音楽 (声楽)		0	4	4							
			音楽		0	20	20							

4月1日現在

## 音楽科 生徒数

西暦	平成	学年	組	男子	女子	計	総計
2010	22	1	A	6	28	34	
			B	0	33	33	
			C	0	33	33	
		2	A	3	30	33	
			B	4	29	33	
			C	0	34	34	
		3	A	5	35	40	
			B	4	35	39	
			C	0	40	40	319
2011	23	1	A	5	24	29	
			B	6	24	30	
			C	0	29	29	
		2	A	3	30	33	
			B	3	30	33	
			C	0	33	33	
		3	A	4	29	33	
			B	3	30	33	
			C	0	33	33	286
2012	24	1	A	6	30	36	
			B	6	29	35	
			C	0	35	35	
		2	A	4	24	28	
			B	3	26	29	
			C	3	26	29	
		3	A	6	27	33	
			B	0	32	32	
			C	0	33	33	290
2013	25	1	A	5	25	30	
			B	4	26	30	
			C	0	30	30	
		2	A	4	29	33	
			B	5	29	34	
			C	0	34	34	
		3	A	5	23	28	
			B	5	23	28	
			C	0	29	29	276
2014	26	1	A	5	21	26	
			B	5	21	26	
			C	0	27	27	
		2	A	4	26	30	
			B	4	25	29	
			C	0	29	29	
		3	A	5	28	33	
			B	4	29	33	
			C	0	32	32	265

西暦	平成	学年	組	男子	女子	計	総計
2015	27	1	A	5	27	32	
			B	4	27	31	
			C	0	27	27	
		2	A	5	21	26	
			B	5	21	26	
			C	0	27	27	
		3	A	4	25	29	
			B	3	26	29	
			C	0	29	29	229
2016	28	1	A	4	23	27	
			B	5	22	27	
			C	0	26	26	
		2	A	5	25	30	
			B	4	27	31	
			C	0	27	27	
		3	A	5	21	26	
			B	5	21	26	
			C	0	28	28	221
2017	29	1	A	6	23	29	
			B	6	23	29	
			C	7	21	28	
		2	A	4	22	26	
			B	4	22	26	
			C	0	27	27	
		3	A	4	26	30	
			B	4	26	30	
			C	0	25	25	225
2018	30	1	A	4	32	36	
			B	4	31	35	
			C	0	35	35	
		2	A	7	20	27	
			B	6	21	27	
			C	6	21	27	
		3	A	4	21	25	
			B	4	21	25	
			C	0	25	25	262
2019	31	1	A	4	24	28	
			B	4	24	28	
			C	5	22	27	
		2	A	4	31	35	
			B	4	31	35	
			C	0	34	34	
		3	A	6	20	26	
			B	6	20	26	
			C	6	19	25	264

4月1日現在

## 普通科 生徒数

西暦	平成	学年	組	男子	女子	計	総計
2010	22	1	A	7	13	20	
			B	6	13	19	
		2	A	5	22	27	
			B	5	22	27	
		3	A	6	15	21	
			B	5	16	21	135
2011	23	1	A	5	16	21	
			B	5	15	20	
		2	A	7	14	21	
			B	6	15	21	
		3	A	4	22	26	
			B	4	22	26	135
2012	24	1	A	5	18	23	
			B	5	17	22	
		2	A	5	15	20	
			B	5	15	20	
		3	A	7	14	21	
			B	6	14	20	126
2013	25	1	A	7	18	25	
			B	6	18	24	
		2	A	5	18	23	
			B	5	18	23	
		3	A	5	16	21	
			B	5	15	20	136
2014	26	1	A	6	21	27	
			B	5	21	26	
		2	A	7	18	25	
			B	6	19	25	
		3	A	5	18	23	
			B	5	18	23	149
2015	27	1	A	8	24	32	
			B	7	25	32	
		2	A	6	20	26	
			B	5	20	25	
		3	A	7	18	25	
			B	6	19	25	165
2016	28	1	A	9	23	32	
			B	10	22	32	
		2	A	7	23	30	
			B	7	23	30	
		3	A	7	19	26	
			B	5	20	25	175

西暦	平成	学年	組	男子	女子	計	総計
2017	29	1	A (総進)	5	23	28	
			B (総進)	4	23	27	
			C (特進)	3	19	22	
		2	A	9	21	30	
			B	9	20	29	
		3	A	7	23	30	
			B	7	23	30	196
2018	30	1	A (総進)	4	27	31	
			B (特進)	3	12	15	
		2	A (総進)	5	20	25	
			B (総進)	4	21	25	
			C (特進)	3	18	21	
		3	A	10	19	29	
			B	9	20	29	175
2019	31	1	A (総進)	9	22	31	
			B (総進)	8	22	30	
			C (特進)	6	18	24	
		2	A (総進)	3	27	30	
			B (特進)	4	12	16	
		3	A (総進)	5	20	25	
			B (総進)	4	20	24	
			C (特進)	2	18	20	200

4月1日現在

## 中学校 担任一覽表

西曆	平成	学年	組	担任名
2010	22	1	A	矢野恒一郎
			B	小安真
			C	柳沼咲紀
		2	A	小向宏明
			B	富田美智子
		3	A	鬼塚貴元
B	村田ひろみ			
2011	23	1	A	村田ひろみ
			B	石川慶子
		2	A	矢野恒一郎
			B	鬼塚貴元
			C	柳沼咲紀
		3	A	小安真
B	富田美智子			
2012	24	1	A	富田美智子
			B	中村展子
		2	A	小安真
			B	村田ひろみ
		3	A	矢野恒一郎
			B	鬼塚貴元
C	柳沼咲紀			
2013	25	1	A	宮部正志
			B	中村展子
		2	A	木崎充裕
			B	富田美智子
		3	A	山崎斉一
			B	村田ひろみ
2014	26	1	A	森康彦
			B	谷津真由美
		2	A	宮部正志
			B	中村展子
		3	A	木崎充裕
			B	石川慶子
2015	27	1	A	谷津真由美
			B	秋場健志
		2	A	森康彦
			B	稲川優子
		3	A	中村展子
			B	根本由紀
2016	28	1	A	矢野恒一郎
			B	小向宏明
		2	A	秋場健志
			B	稲川優子
		3	A	森康彦
			B	村田ひろみ

西曆	平成	学年	組	担任名
2017	29	1	A	中村展子
			B	円山利絵
		2	A	矢野恒一郎
			B	小向宏明
		3	A	柳沼咲紀
			B	富田美智子
2018	30	1	A	岡田理枝
			B	稲川優子
		2	A	中村展子
			B	円山利絵
		3	A	矢野恒一郎
			B	五十嵐稔
2019	31	1	A	稲川優子
			B	向島みのり
		2	A	岡田理枝
			B	伊藤久美子
		3	A	中村展子
			B	矢野恒一郎

4月1日現在

## 音楽科 担任一覽表

西曆	平成	学年	組	担任名
2010	22	1	A	小笠原 恭子
			B	根本 由紀
			C	磯部 寿美恵
		2	A	山 崙 斉一
			B	山 本 康雄
			C	牛 島 正裕
		3	A	宮 部 正志
			B	円 山 利絵
			C	榎 本 美子
2011	23	1	A	宮 部 正志
			B	牛 島 正裕
			C	円 山 利絵
		2	A	根本 由紀
			B	神 林 紘一
			C	磯部 寿美恵
		3	A	篠 木 秀一
			B	岩 松 美代子
			C	榎 本 美子
2012	24	1	A	牛 島 正裕
			B	榎 本 美子
			C	岩 松 美代子
		2	A	山 崙 斉一
			B	神 林 紘一
			C	円 山 利絵
		3	A	根本 由紀
			B	篠 木 秀一
			C	宮 部 正志
2013	25	1	A	篠 木 秀一
			B	鬼 塚 貴元
			C	磯部 寿美恵
		2	A	矢 野 恒一郎
			B	福 田 泰啓
			C	岩 松 美代子
		3	A	神 林 紘一
			B	円 山 利絵
			C	吉 野 康弘
2014	26	1	A	鬼 塚 貴元
			B	山 崙 斉一
			C	円 山 利絵
		2	A	磯部 寿美恵
			B	神 林 紘一
			C	根本 由紀
		3	A	矢 野 恒一郎
			B	福 田 泰啓
			C	岡 田 理枝

西曆	平成	学年	組	担任名
2015	27	1	A	岡 田 理枝
			B	榎 本 美子
		2	A	山 崙 斉一
			B	篠 木 秀一
			C	円 山 利絵
		3	A	鬼 塚 貴元
			B	磯部 寿美恵
			C	神 林 紘一
		2016	28	1
B	榎 本 美子			
C	根本 由紀			
2	A			岡 田 理枝
	B			宮 部 正志
3	A			篠 木 秀一
	B			山 崙 斉一
	C			円 山 利絵
2017	29			1
		B	榎 本 美子	
		C	岩 松 美代子	
		2	A	福 田 泰啓
			B	安 藤 丘
		3	A	根本 由紀
			B	宮 部 正志
			C	岡 田 理枝
		2018	30	1
B	伊 藤 芳明			
C	大 沼 淳			
2	A			神 林 紘一
	B			榎 本 美子
3	A			森 康彦
	B			福 田 泰啓
	C			鬼 塚 貴元
2019	31			1
		B	五十嵐 稔	
		C	円 山 利絵	
		2	A	岩 松 美代子
			B	伊 藤 芳明
			C	大 沼 淳
		3	A	鬼 塚 貴元
			B	神 林 紘一
			C	榎 本 美子
3	A	森 康彦		
	B	榎 本 美子		
	C	森 康彦		

4月1日現在



## 普通科 担任一覽表

西曆	平成	学年	組	担任名
2010	22	1	A	福 田 泰 啓
			B	青 木 美 樹
		2	A	甲 田 直 弘
			B	大 沼 淳
		3	A	秋 場 健 志
			B	伊 藤 久美子
2011	23	1	A	木 崎 充 裕
			B	稲 川 優 子
		2	A	福 田 泰 啓
			B	谷 津 真由美
		3	A	甲 田 直 弘
			B	大 沼 淳
2012	24	1	A	木 崎 充 裕
			B	伊 藤 久美子
		2	A	稲 川 優 子
			B	甲 田 直 弘
		3	A	福 田 泰 啓
			B	谷 津 真由美
2013	25	1	A	秋 場 健 志
			B	柳 沼 咲 紀
		2	A	牛 島 正 裕
			B	大 沼 淳
		3	A	稲 川 優 子
			B	滝 澤 秀
2014	26	1	A	小 安 真
			B	村 田 ひろみ
		2	A	牛 島 正 裕
			B	柳 沼 咲 紀
		3	A	大 沼 淳
			B	稲 川 優 子
2015	27	1	A	木 崎 充 裕
			B	村 田 ひろみ
		2	A	小 安 真
			B	大 沼 淳
		3	A	牛 島 正 裕
			B	岩 松 美代子
2016	28	1	A	牛 島 正 裕
			B	磯 部 寿美恵
		2	A	伊 藤 芳 明
			B	岩 松 美代子
		3	A	小 安 真
			B	大 沼 淳

西曆	平成	学年	組	担任名
2017	29	1	A	谷 津 真由美
			B	伊 藤 芳 明
			C	秋 場 健 志
		2	A	森 康 彦
			B	磯 部 寿美恵
		3	A	甲 田 直 弘
B	村 田 ひろみ			
2018	30	1	A	甲 田 直 弘
			B	添 田 丈 人
		2	A	山 嵩 齐 一
			B	柳 沼 咲 紀
			C	秋 場 健 志
		3	A	村 田 ひろみ
B	磯 部 寿美恵			
2019	31	1	A	阿 部 早紀子
			B	辻 美 和
			C	秋 場 健 志
		2	A	吉 野 千 瑛
			B	甲 田 直 弘
		3	A	牛 島 正 裕
B	柳 沼 咲 紀			
C	添 田 丈 人			

4月1日現在

## くにたち音楽会の記録

西暦	元号	回数	会場	開催日	備考
2010	平成22	58	国立音楽大学講堂小ホール	12月20日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月16日	合唱
2011	平成23	59	国立音楽大学講堂小ホール	12月18日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月22日	合唱
2012	平成24	60	国立音楽大学講堂小ホール	12月20日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月21日	合唱
2013	平成25	61	国立音楽大学講堂小ホール	12月19日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月20日	合唱
2014	平成26	62	国立音楽大学講堂小ホール	12月17日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月18日	合唱 特別演奏（全国高等学校総合体育大会総合開会式委嘱作品）
2015	平成27	63	国立音楽大学講堂小ホール	12月19日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月17日	合唱
2016	平成28	64	国立音楽大学講堂小ホール	12月18日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月19日	合唱
2017	平成29	65	国立音楽大学講堂小ホール	12月18日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月19日	合唱 普通科2年混声合唱出演
2018	平成30	66	国立音楽大学講堂小ホール	12月16日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月11日	合唱
2019	令和1	67	国立音楽大学講堂小ホール	12月12日	ソロ・アンサンブル
			国立音楽大学講堂大ホール	12月13日	合唱

注記：普通科はカリキュラム改変に伴い、第53回を最後に出演していなかった。  
更なる改変により合唱の授業が再開され、第65回より出演している。



ソロ・アンサンブルの部



合唱の部

# 学校旅行

## <中学校>

1年 秋の遠足			
年度	日付	方面	備考
2010(平成22)年度	6/1	山梨県河口湖	 秋の遠足・森永工場見学   秋の遠足・横浜中華街
2011(平成23)年度	11/5	上野（東京国立博物館・国立西洋美術館・東京文化会館）	
2012(平成24)年度	10/5	千葉県野田市	
2013(平成25)年度	10/11	浅草・江戸東京博物館・葛西臨海水族園	
2014(平成26)年度	10/17	神奈川県横浜市	
2015(平成27)年度	10/16	神奈川県横浜市	
2016(平成28)年度	10/18	神奈川県横浜市	
2017(平成29)年度	10/13	上野（東京国立博物館・上野動物園）	
2018(平成30)年度	10/19	上野（東京国立博物館・上野動物園）	
2019(令和元)年度	10/18	豊洲（キッザニア・英語プログラム）	

2年 秋の旅				
年度	日付	泊・日数	方面	備考
2010(平成22)年度	11/7~9	2泊3日	京都・奈良・静岡	 京都旅行
2011(平成23)年度	10/24~26	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2012(平成24)年度	10/21~23	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2013(平成25)年度	10/30~11/1	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2014(平成26)年度	10/29~31	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2015(平成27)年度	10/28~30	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2016(平成28)年度	10/30~11/1	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2017(平成29)年度	10/16~18	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2018(平成30)年度	10/17~19	2泊3日	京都・奈良・静岡	
2019(令和元)年度	10/14~16	2泊3日	京都・奈良・静岡	

3年 修学旅行				
年度	日付	泊・日数	方面	備考
2010(平成22)年度	10/4~7	3泊4日	北海道	2010年度からスキー教室は中止
2011(平成23)年度	10/18~21	3泊4日	北海道	 北海道修学旅行・アイヌ民族博物館にて   北海道修学旅行・ファーム体験 2019年度については予定
2012(平成24)年度	10/3~6	3泊4日	北海道	
2013(平成25)年度	10/16~19	3泊4日	北海道	
2014(平成26)年度	10/15~18	3泊4日	北海道	
2015(平成27)年度	10/12~15	3泊4日	北海道	
2016(平成28)年度	10/10~13	3泊4日	北海道	
2017(平成29)年度	10/10~13	3泊4日	北海道	
2018(平成30)年度	10/9~12	3泊4日	北海道	
2019(令和元)年度	10/8~11	3泊4日	北海道	

<音楽科>

1年 秋の旅 2年 奈良旅行				
年度	日付	泊・日数	方面	備考
2010(平成22)年度	10/13~15	2泊3日	東北	1年
	10/13~15	2泊3日	奈良	2年
2011(平成23)年度	10/12~14	2泊3日	東北	この学年から2年の奈良旅行は中止、 修学旅行を2年で実施
2012(平成24)年度	10/17~19	2泊3日	東北	 <p>東北旅行「鹿踊り」鑑賞</p>
2013(平成25)年度	10/16~18	2泊3日	東北	
2014(平成26)年度	10/15~17	2泊3日	東北	
2015(平成27)年度	10/14~16	2泊3日	東北	
2016(平成28)年度	10/26~28	2泊3日	東北	
2017(平成29)年度	10/25~27	2泊3日	東北	
2018(平成30)年度				

2年・3年 修学旅行				
年度	日付	泊・日数	方面	備考
2010(平成22)年度	5/30~6/3	4泊5日	熊本・長崎	
2011(平成23)年度	5/29~6/2	4泊5日	熊本・長崎	この学年から2年の奈良旅行は 中止、修学旅行を2年で実施
	10/10~14	4泊5日	熊本・長崎	2年生
2012(平成24)年度	10/14~18	4泊5日	熊本・長崎	
2013(平成25)年度	10/14~18	4泊5日	熊本・長崎	
2014(平成26)年度	10/14~17	3泊4日	熊本・長崎	10/13(月)出発の予定が 台風の 影響で10/14(火)出発となった。
2015(平成27)年度	10/24~28	4泊5日	四国・神戸	
2016(平成28)年度	10/25~29	4泊5日	四国・神戸	
2017(平成29)年度	10/9~12	3泊4日	長崎・福岡	
2018(平成30)年度	10/8~11	3泊4日	長崎・福岡	
2019(令和元)年度	10/7~11	4泊5日	沖縄・石垣	

2019年度については予定



音楽科修学旅行・軍艦島



音楽科修学旅行・ハウステンボス

<普通科>

1年 秋の旅行				
年度	日付	泊・日数	方面	備考
2010(平成22)年度	10/20~22	2泊3日	東北	
2011(平成23)年度	10/12~14	2泊3日	長野	東日本大震災の被害を考慮し、方面を変更
2012(平成24)年度	10/10~12	2泊3日	長野	
2013(平成25)年度	10/9~11	2泊3日	長野	
2014(平成26)年度	10/22~24	2泊3日	東北	再び東北方面(被災地での震災学習を含む)に変更
2015(平成27)年度	10/21~23	2泊3日	東北	
2016(平成28)年度	10/26~28	2泊3日	東北	
2017(平成29)年度	10/25~27	2泊3日	東北	
2018(平成30)年度	10/24~26	2泊3日	東北	
2019(令和元)年度	10/24~26	2泊3日	東北	

2年・3年 修学旅行				
年度	日付	泊・日数	方面	備考
2010(平成22)年度	4/5~9	4泊5日	沖縄	
2011(平成23)年度	4/5~9	4泊5日	沖縄	
2012(平成24)年度	4/3~7	4泊5日	沖縄	
2013(平成25)年度	4/2~6	4泊5日	沖縄	
2014(平成26)年度	4/1~5	4泊5日	沖縄	
2015(平成27)年度	4/1~5	4泊5日	沖縄	3年生
	3/6~10	4泊5日	沖縄	この学年から修学旅行は2年で実施
2016(平成28)年度	3/7~10	3泊4日	沖縄	この学年から修学旅行は3泊4日に
2017(平成29)年度	3/7~10	3泊4日	沖縄	
2018(平成30)年度	3/6~9	3泊4日	沖縄	
2019(令和元)年度	3/6~9	3泊4日	沖縄	

2019年度については予定



普通科修学旅行・首里城



普通科修学旅行・沖縄戦跡での祈り



普通科修学旅行・お礼の合唱

# できごと年表～セレクション～

\*出張コンサート一覧に既出の物は除く  
\*「くにおんダイアリー」、学校twitter、学校Facebookから

西暦	元号	月日	タイトル	出演者ほか	メディアほか	主催団体名ほか
2010	平成22	3月6日	テレビ番組「国立音高生が地域謝恩コンサート」	マイテレビ・地域トピックス	JCNマイテレビ (現:ジェイコム多摩)	
2010	平成22	12月18日	Yuying Secondary School Concert Band (シンガポール)と中学プラスバンド部との交流会	中学プラスバンド部		
2011	平成23	12月11日	クリスマスイルミネーション点灯式 (ファンファーレ演奏、合唱)	中学・音楽科 プラスバンド部ほか、出演		国立駅前大学 通り商店会主催
2011	平成23	12月23日	大学通り「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		
2012	平成24	1月22日	くにおんNPO/市民交流会 世代間交流「子どもから大人まで各世代によるチャリティーコンサート」	中高合唱部出演		くにおんNPO/市民交流会実行委員会主催
2012	平成24	1月22日	「TRC新着AV」表紙に図書館が掲載	図書館内部、視聴室	図書館流通センター 情報誌2012年1月号	
2012	平成24	5月13日	商協花まつり	中高合唱部、中学・音楽科 プラスバンド部		国立商業協同組合主催
2012	平成24	12月8日	クリスマスイルミネーション点灯式 (ファンファーレ演奏、合唱)	中学・音楽科 プラスバンド部ほか、出演		国立駅前大学 通り商店会主催
2012	平成24	12月23日	大学通り「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		
2013	平成25	3月22日	テレビ番組 スコラ 坂本龍一 音楽の学校 シーズン3「オーケストラ」第2回	音楽科オーケストラ 出演	NHK Eテレビで放送	
2013	平成25	5月19日	商協花まつり	中高合唱部、中学・音楽科 プラスバンド部		国立商業協同組合主催
2013	平成25	6月1日	東京音楽大学附属高等学校交歓演奏会	小倉茉緒(音楽科3年) 出演		
2013	平成25	8月6日	「原爆風化させぬ」並んだ決意の言葉 国立で、33点展示	音中生が入選	朝日新聞 (東京西部版)	国立市主催
2013	平成25	8月27日	〃 関連行事 「ミニコンサート」	音楽科生出演		国立市主催
2013	平成25	8月28日	現役学生によるピアノサロンコンサート 音大受験生のための銀座音大フェスティバル2013	小倉茉緒(音楽科3年) 出演		ピティナ 銀座支部主催
2013	平成25	10月3日	独の名門校オケ部が来日 高校生と共演(学ぶ育む)	カニジウス校との交流演奏会(9月25日国立オリンピック記念青少年総合センター)	読売新聞	
2013	平成25	11月30日	ボールルームダンス デモンストレーション	中学生全員、高校生有志参加	JCNマイテレビ (現:ジェイコム多摩)で放送	日本ボールルームダンス連盟主催
2013	平成25	12月7日	クリスマスイルミネーション点灯式 (ファンファーレ演奏、合唱)	音楽科有志	注:山本康雄作曲のファンファーレ演奏	国立駅前大学 通り商店会主催
2013	平成25	12月23日	大学通り「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		
2014	平成26	3月	学校キャラバン隊のボールルームダンス特別授業!	(11月30日デモンストレーションの特集)	ダンスビュー 3月号	平成25年 11月29日実施
2014	平成26	4月27日	テレビ番組 NHK「小さな旅」国立市編	生徒出演	NHK総合で放送	
2014	平成26	5月17日	商協花まつり	中高合唱部、中学・音楽科 プラスバンド部		国立商業協同組合主催
2014	平成26	7月15日	「高校総体選手に歌で元気」 国立音大付の福永さん独唱	福永真優(音楽科3年) 出演	東京新聞	
2014	平成26	8月2日	「全国高校総体開会式 国立音大付附属校福永さんが独唱」	「いつかこの手で」福永真優(音楽科3年)出演	8月1日味の素スタジアム	全国高等学校体育連盟主催
2014	平成26	11月4日	くにおん秋の市民祭り	普通科吹奏楽部出演		国立市主催
2014	平成26	11月16日	ふれあい西の市	(サクソフォン演奏) 音楽科2年出演		国立西商店会 主催
2014	平成26	12月7日	クリスマスイルミネーション点灯式 (ファンファーレ演奏、合唱)	中学・音楽科 プラスバンド部ほか、出演		国立駅前大学 通り商店会主催
2014	平成26	12月23日	大学通り「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		
2015	平成27	3月30日	くにおんアートピエンナーレ 授賞式	くにおんアートピエンナーレ テーマ曲「祝祭」山本康雄(教諭)作曲祝祭合奏団演奏		国立市主催

西暦	元号	月日	タイトル	出演者ほか	メディアほか	主催団体名ほか
2015	平成27	5月24日	大成國中音楽会	齊藤梨乃(音楽科2年) 森遥香(音楽科3年)出演	台湾台南市 文化センターホール	
2015	平成27	6月7日	花まつり LINKくになち	中高合唱部、中学・ 音楽科 プラスバンド部		国立商業協同 組合主催
2015	平成27	8月8日	第3回楽器作り体験教室	輪ゴムギターを作る	同日、同窓会主催ミュージックフェスタで演奏	学校行事
2015	平成27	8月20日	クラシックコンサート	くになち市民芸術小 ホール	音楽科生の企画制 作、演奏	国立文化・スポー ツ振興財団後援
2015	平成27	11月3日	くになち秋の市民祭り	普通科吹奏楽部		国立市主催
2015	平成27	11月18日	ヴァルベリス合唱団(リトアニア)交流演奏会	中学生全員	国立音楽大学小 ホール	リトアニアの男声合 唱団ICEDの紹介で 交流演奏が実現
2015	平成27	12月17日	日韓国交正常化50周年記念公演「未来のために」 ～歌でつづる日韓交流の歩み～	中学校合唱部出演	紀尾井ホール	日韓文化交流 基金主催
2015	平成27	12月5日	クリスマスイルミネーション点灯式	中学・音楽科プラス バンド部ほか、出演		国立駅前大学 通り商店会主催
2015	平成27	12月23日	大学通り「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		
2016	平成28	2月6日他	映画「僕らのごはんは明日で待ってる」	瀬尾まいこ原作 市井昌 秀監督 中島裕翔、新木 優子主演	校舎、校庭を使った ロケ	平成29年 1月7日公開
2016	平成28	3月11日	「思いつづける 3.11」 ～犠牲者・被災者・避難者のために祈るつどい～ カルツァス作曲マニフィカト演奏	国立音楽大学創立 90周年記念合唱団に 高校生も参加	カトリック東京カテド ラル関口教会 聖マリア大聖堂	
2016	平成28	5月15日	花まつり LINKくになち	中高合唱部、中学・音楽 科 プラスバンド部		国立商業協同 組合主催
2016	平成28	7月3日	高校野球選手権大会東西東京大会開会式	窪田有紗(音楽科3年) 出演	神宮球場 東京MX テレビ(生中継)	東京都高等学校 野球連盟主催
2016	平成28	7月3日	「国歌独唱は国立音楽大学付属の 窪田有紗さんが担当」	〃	東京新聞	
2016	平成28	8月6日	楽器作り体験教室	レインスティックを作る		小学生対象行事
2016	平成28	8月	リオデジャネイロ・オリンピック セーリング女子470級5位入賞	吉田 愛(旧姓:近藤)さん (音楽科50回生)		
2016	平成28	9月30日	国立国際医療研究センター病院コンサート	中学合唱部		
2016	平成28	10月1日	附属小学校運動会	中学校プラスバンド部 演奏	音小卒業生のプラス バンド部員の発案 以後毎年続いている	
2016	平成28	10月4日	国立国際医療研究センター病院コンサート	中学合唱部		
2016	平成28	10月14日	テレビ番組「ミュージックステーション」	miwaさんと合唱コンク ール課題曲「結 -ゆい-」 を中学合唱部が共演	テレビ朝日 で放送	
2016	平成28	10月23日	国立市青少年音楽フェスティバル	中学合唱部	くになち市民総合 体育館	国立市教育 委員会主催
2016	平成28	12月3日	クリスマスイルミネーション点灯式 (ファンファーレ演奏、合唱)	中学・音楽科 プラス バンド部ほか、出演		国立駅前大学 通り商店会主催
2016	平成28	12月10日	音幼音楽会	音楽科生参加 (吉澤萌子ほか)		附属幼稚園から の依頼による
2016	平成28	12月11日	街かどコンサート in 旭通り 2016	音楽科生出演		旭通り商店会主催
2016	平成28	12月23日	大学通り「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		
2016	平成28	12月27日	テレビ番組「全力!DANCEストーリー」 ～男子生徒が力を合わせて踊る!～ 女子生徒へ贈る「決意のダンス」	中学3年男子ほか出演	テレビ東京 で放送	
2017	平成29	1月21日	第12回地域音楽祭	高校合唱部	墨田区立文花中学校	
2017	平成29	2月5日	第8回中学生「東京駅伝」大会	大石啓莉(中学2年) 出場	味の素スタジアム Jcom(生中継)	東京都教育 委員会主催
2017	平成29	4月19日	ボンファンテス少年合唱団(チェコ)と中高合唱部 交流演奏会	中高合唱部	2号館スタジオ	
2017	平成29	4月23日	春の教員演奏会		2号館スタジオ	公開行事

西暦	元号	月日	タイトル	出演者ほか	メディアほか	主催団体名ほか
2017	平成29	5月13日	国際ソロプチミストくにたち認証30周年記念式典	音楽科プラスバンド部出演		
2017	平成29	5月14日	LINKくにたち	中高合唱部、中高音楽科 プラスバンド部		国立商業協同 組合主催
2017	平成29	7月9日	高校野球選手権大会東西東京大会開会式	植田温子(音楽科3年) 出演	神宮球場 MXテレビ(生中継)	東京都高等学校 野球連盟主催
2017	平成29	7月9日	「応援の思い歌声に 植田さん国歌独唱」	〃	読売新聞	〃
2017	平成29	7月9日	「君が代独唱、笑顔も心がけた」国立音大付 3年植田さん	〃	朝日新聞	〃
2017	平成29	7月14日	リンツ音楽高校生による演奏会	2号館スタジオ		
2017	平成29	7月20日	キッズニア中学生限定 JCJソーシャルプログラム	中学生参加		特別招待
2017	平成29	8月28日	「響けよ歌声 日韓高校生が架け橋」 言葉の壁越えたい	窪田有紗、花田美和、 榎原敬之(以上、音楽科 3年)、足立悠道(音楽科 2年)出演	朝日新聞 (ちば首都圏版)	
2017	平成29	8月31日	響けよ歌声 演奏会	〃	3号館生徒ホール	日本韓国音楽高 校生コンサート 実行委員会主催
2017	平成29	9月2日	響けよ歌声 演奏会	〃	川崎市国際交流セ ンター 談話ロビー	〃
2017	平成29	9月26日	国立国際医療研究センター病院コンサート	中学合唱部		
2017	平成29	10月28日	国立市青少年音楽フェスティバル	中学合唱部	くにたち市民総合 体育館	国立市教育 委員会主催
2017	平成29	11月26日	「通販の安易な利用やめました」Voice 声100年	松本帆奈 (普通科3年、投稿)	朝日新聞	
2017	平成29	12月2日	クリスマスイルミネーション点灯式	中高合唱部、中高音楽 科プラスバンド部		国立駅前大学 通り商店会主催
2017	平成29	12月23日	クリスマスイベント、大学通り 「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		国立駅前大学 通り商店会主催
2018	平成30	1月26日	第13回地域音楽祭	中高合唱部	墨田区立 文花中学校	第5回から継続 して参加
2018	平成30	3月14日	国立国際医療研究センター病院コンサート	中学合唱部		
2018	平成30	4月22日	春の教員演奏会		2号館スタジオ	公開行事
2018	平成30	5月13日	LINKくにたち	中高合唱部、中高音楽 科プラスバンド部		「市報くにたち」 にも掲載
2018	平成30	5月20日	くにたち de ☆Start	第1回合唱フェスティバル		
2018	平成30	6月25日 発行	第100回記念大会の情景①開会式斉唱 「思いを声に乗せて」	週刊ベースボール別冊 立夏号「第100回全国 高校野球選手権記念東・ 西東京大会展望号」	週刊ベースボール 別冊	高校野球開会式 国歌 甲田朱奈 (音楽科2年)大会 歌 足立悠道(音 楽科3年)を取材
2018	平成30	7月発行	日経DUAL「中学受験合格ガイド」君が輝く 学校特集 可能性を伸ばす中高一貫校	厳選された全21校を 一挙紹介	日経DUAL (日本経済新聞)	
2018	平成30	7月2日	高校野球選手権大会東西東京大会開会式	高校野球開会式 国歌 甲田朱奈(音楽科2年) 大会歌 足立悠道(音楽 科3年)出演	神宮球場 東京MXテレビ (生中継)	東京都高等学校 野球連盟主催
2018	平成30	7月2日	「青空の下響く独唱」	〃	朝日新聞	〃
2018	平成30	7月2日	「国歌独唱伸びやかに」国立音大付甲田さん	〃	読売新聞	〃
2018	平成30	8月4日	第20回全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト	特別部門(ドイツ語選 生全員による学校紹介 映像作品)	「心を震わせてくれ たで賞」受賞	獨協大学主催
2018	平成30	9月23日	「国歌奏で、世界の選手にエール」GOGO高校	オリンピック・パラリンピック 国歌調査演奏プロジェクト	朝日中高生新聞	
2018	平成30	10月14日	秋の教員演奏会		2号館スタジオ	公開行事
2018	平成30	10月27日	国立市青少年音楽フェスティバル(第5回)	中学合唱部	くにたち市民総合 体育館	国立市教育 委員会主催



西暦	元号	月日	タイトル	出演者ほか	メディアほか	主催団体名ほか
2018	平成30	10月	「夕日をあびて」平成29年度音楽科3年総合的な学習の時間 実践記録まとまる	山本康雄・宮部正志(元教諭)による		
2018	平成30	12月2日	第7回 国立市 認知症の日 イベント	中高合唱部	一橋大学 兼松講堂	国立市主催
2018	平成30	12月2日	クリスマスイルミネーション点灯式	中学・音楽科 プラスバンド部ほか、出演		国立駅前大学 通り商店会主催
2018	平成30	12月23日	大学通り「クリスマス・ストリート・コンサート」	中高合唱部		
2019	平成31	3月9日	癒しの「地域演奏」学活たま	地域謝恩コンサートについて	読売新聞	
2019	平成31	3月14日	国立国際医療研究センター病院コンサート	中学合唱部	中央棟地下アトリウム	
2019	令和1	5月12日	LINKくにたち	中高合唱部、中高音楽科プラスバンド部		国立商業協同組合主催
2019	令和1	6月7日	大成国中学交流音楽会	中学校弦楽オーケストラ共演	2号館スタジオ	
2019	令和1	6月29日	国立音楽大学「七夕祭」ボランティア		連携プログラム	幼児教育専攻主催
2019	令和1	7月6日	高校野球選手権大会東西東京大会開会式	宮嶋優有(音楽科2年)出演	神宮球場 東京MXテレビ(生中継)	東京都高等学校野球連盟主催
2019	令和1	7月7日	「国歌独唱「私の夢の第一歩」国立音大付音楽科の宮嶋さん」	〃	朝日新聞	〃
2019	令和1	7月7日	「心込め国歌独唱 国立音大付・宮嶋さん」	〃	読売新聞	〃
2019	令和1	7月12日	リンツ高生によるソリスト演奏会		2号館スタジオ	
2019	令和1	7月15日	ソリストンコンサート(リンツ高生と共演)	音楽科、中3生オーケストラ	大学講堂	
2019	令和1	7月18日	附属幼稚園「夏のお泊り会」ボランティア(～19日)	高校2、3年生	連携プログラム	
2019	令和1	7月20日	大倉記念学術振興会芸術公演「フルートのしらべ」プレコンサート	音楽科生出演	大倉喜八郎 進一層館(フォワードホール)	大倉記念学芸振興会主催
2019	令和1	7月23日	「グローバル&ローカル～国立音楽大学附属中学校・高等学校」	まちの景色を奏でる音楽ルッカ・北秋田・国立文化交流特集号01	Pocket Orchestral 2019.summer	地元企業「せきや」発行のフリーペーパー
2019	令和1	9月29日	カニジウス校との交流演奏会	音楽科、中3生オーケストラ	オリンピックセンター	
2019	令和1	10月24日	第9回平和首長会議国内加盟都市会議総会	音楽科生出演	ピエンナーレの「祝祭」山本康雄作曲を演奏	ピースフロム国立主催



国立国際医療研究センター病院  
コンサート(中学合唱部)



カニジウス校との交流演奏会



横浜ジャズ・プロムナード(普通科ジャズ部)



七夕祭ボランティア



ボニファンテスとの交流演奏会



高校野球東京大会開会式における君が代独唱

## 編集後記

本校は、自らの歴史を残すことについて熱心ではなかった。データの蓄積、事実の年次順整理という、ありそうなことがなかったのだ。そこに無理を承知で切り込んでいったのが、60周年記念誌であった。学校の動静を客観的に見ること、当事者として熱意を述べること、事後の感想を残すこと、などが関係者、関係各所のご協力のもとに初めて形になった。その後10年の間に、学校を取り巻く社会情勢の急変により、本校は改革・変革を余儀なくされた。70周年記念誌として形になったこれは、この10年を「変革の10年」と捉えた上で、60周年記念誌の基本理念を引き継いでデータ蓄積を継続すること、変革の先頭に立った者の意志を残すこと、10年の時間の流れを冷静に見つめる視点を取り入れること、時々のエピソードを楽しい読み物にすること、などの実現を図ったものである。2019年4月からの短期間で形になったのは、運営委員会の無謀な要請に嫌な顔一つせず協力して下さった方々のおかげである。ここに謝意を表す。

今後10年毎の節目には、本誌内容を踏襲した新しい記録が残されていく予定である。その集大成が100周年誌として世に出る事を楽しみに、その基礎の一角を担ったことを喜びとするものである。

和田 多美子

70周年記念行事企画運営委員会

担当副校長 村田 ひろみ

記念誌部門

委員長 和田 多美子

委員 秋場 健志

伊藤 久美子

大沼 淳

福田 泰啓

創立七十周年記念誌  
国立音楽大学附属中学校・高等学校  
2009～2019の歩み

2019年10月1日発行

編集／発行 国立音楽大学附属中学校  
国立音楽大学附属高等学校  
70周年記念行事企画運営委員会記念誌部門

印刷 株式会社 **立川印刷所**

